# 燕石襍志


一 鬼神餘論
二 蟬丸
附 関東
三 悪禪師
四 正儀義隆
附 長篠
五 八幡太郎
附 一休詠歌
六 浅草事實
七 地名の訛謬
八 四時代謝
九 つるをる所
十 ぢぐ木
士 字體
附 俗字考


巻之上止


1 貴 5
116
3

門 イ曽5
號 116
巻 3

# 燕石雜志巻之三

江戸　蓑笠軒
鹿澤辭瑣吉述

足立藏書

## 一　鬼神餘論

鬼神の論いまゝ盡さゞ物なくびとゝなられを述てゝ童蒙のたゝへとせう

疫鬼瘟鬼とゝふものあり疫鬼い俗よりの疫病神疫鬼い俗よりの疱瘡神

なり和名抄ゝ瘧鬼邪鬼窮鬼ホを生ちり窮鬼の人の家ゝあるゝ耗と

ゝ世俗貧乏神とゝふ是なり和名抄ゝ瘧鬼蔡邕獨斷ニ云ゝ。昔顓

頊ニ有ニ二子。亡去而為疫鬼。其一者居江水。是為瘧鬼。

和名抄ニ云ゝ。邪鬼。日本紀ニ云ゝ。邪鬼。私名安之美乃加乃美　或尒　邪鬼　衣也　阿比波

窮鬼。師説ニ伊岐須　とゝふ　窮鬼遊仙嵐ニ云ゝ。

ゝ流行と顓頊の子亡去ゝ疫鬼とゝるとゝふものハ延安のゝ疫癘ハ冬ゝ

冬ゝて春夏の間最盛なりその寒ゝ傷らゝるものの春夏大陽の毒小觸ゝ

儺を誘引する故に和漢除夜に儺して疫鬼を驅とする我俗これを疫
ちらしとゝ後遠に災厄の厄ともるものゝ惧とし唐山にも立春の日土牛を造
りて農事をすゝむ　天朝亦これに倣ひて大寒の日夜半に陰陽寮
土牛童子の像を造りて門に立て延喜式に土偶人十二枚高各二尺土牛十二頭
とゝえたりその数一年十二箇月を表する歟土牛は青黄赤白黒と春夏秋
冬東西南北の色に隨ひてこれを立るとゝ亦水續文氏紀に慶雲二年とちう
きゝに世の中ちかうとうぶらふ人ほとりとぶ追儺とゝのゝしりて
とゝえ亦慶雲一年天下疫癘盛にして人民多く失しぶ土牛をほゝ
追儺とゝのゝ始まりと云て根えるも記されたり吉田の疫塚これその餘
波歟毎歳節分の夜吉田神祇官にもゝ庭上に塚を築くこれを疫塚
とゝりてその塚正月十九日に至りて鮮去るを清掃とゝのゝ亦この日山城國八幡
の社頭に疫神を祭る亦この月十六日に伊勢國度會郡山田の郷に獅子臥



の神事あり亦三月十日高尾の法華會これを安良比花とゝのゝ花と
敷ちらしと霰運の祓ちらしとこの疫草焚の所今宮の社司の所とこの疫鬼を驅の儀ちとなどこの
祓に至りて止るとゝい夏越に七月に至りて陽気衰ふ故に秋いこれを禳ぐ
王充が鬼は大陽の毒ありとゝいひしいこのゝ疫鬼も又形なし但
一時の氣運に隨ひて流行もるとこその形在がどこも陽衰るに至りて消
然とゝ迹なし譬ば酒食の腐爛もるとこ忽然とゝて蠅の聚るに似り
人その酒飯を撤去ば蠅も又隨ひて迹なこが如しとゝて小蠅鳴悪神とゝ
ものもるに病劇しこの時人往く疫鬼をこるゝのゝとゝのその祓とゝの形
狀一定ちどこるこれ陽毒のあるこ所ゝ疫ゝとゝのこれを山気の蒸ゝ
雲霧を起ちる譬ば山中の人その雲の起るをこれを見ば朦朧たり山下の人
これをこれば別に奇峯を添ぐ如し瘟疫の人に逼る熱邪内に蒸して
毒外に發ちて患者の疫鬼をこるこれ山下にて雲気を瞻望し

是況奇峯とをるが如し人その毒に觸るゝ時ハ必隨て患む故に聖王皇天
郊土を祀まつり陰陽その時に仍ぐ山ざゝんを禱て世俗春夏に祓禊して
ゆく疫鬼を驅る驅とゝ云ども是ハ疫癘の流行たゝ漢に
ましまさんゝ靈ありてをゆく天仲景氏を生じゝ永く疫鬼を驅しむ
天朝　欽明天皇御宇に疫鬼大に起る弓削守屋大連その天災をうして
疫鬼を追はゝ中臣連鎌子と共に良薬ゆゑ苦し
機い長彼一を守り方術を同郡の張伯祖に受傷寒論十卷を著し
天下の疫邪を退治り守屋ハ　天朝の大臣たり權を稱月馬に乘て
遂に疫鬼を攘ゝ亦是一時の氣運に係る歟その成敗に至て予が出
るところにあらず疫鬼も又疫鬼に同じたるに人を懼るゝ疫鬼ゆゑ甚
し世俗にいふ痘ハ小児の疫ゆゑ直に人を殺ゝ疫人と云ハ病ゆゑ棚を
架一切の供物をおく拜具ゝ人を祀るゆゑ最つとめ凡序熱ゆゑ

收斂結痂に及ゝ郊外に送る人敬ゝ遠ゆの意歟ゝ毋戶に入る隨に
痘鬼ものぼりゝその處を沒ゆるが如ゝ往古ハ疱瘡を患ゆの十に八九ハ死
ゆ前後少ゆゝの餘の貴人疱瘡ゆゑ人を
続日本紀。天平七年冬十一月壬寅。云是歲不稔。自
夏至冬天下患豌豆瘡俗曰天花一裏蘇死者妻子ゆ疱瘡のゆゑ史の人を
ゆゝ人ハ歟ゝ歟の後　醍醐　村上　円融の御宇疱瘡ゆゑ人妻ゝ死せ
ゆゝ一條帝の長德四年に至ゆゝ人を患ゆの亦妻ゝ死ゆゑ
ゆ庶民に至ゆゝ一人ゝ七腹ゆゑ
ゆゝ御面に瘢ゆゝ
ゆゝ一度患ゆゑ
の人民ゝ
ゆゝ怪ゝ人も懼ゝ
ゆゝ怪ゝ酒とゆゝ

飲ばその毒烏頭天雄にもまさりたりとて人みな驚おどろきあへりしがやがて醒るとなる
もなく酔といへども飽ことなし此理をきくといふところは疱瘡も亦ありて往古は
ある奇病ある事をしりたが今も五嶋八丈嶋などには疱瘡なしといふあり其嶋
人他処にゆきてこれを患ば必死す是その疫気にふれざる故なりといへり　の
人疱瘡を患ば多く救ひがたきよし今の八丈嶋の人もみなしらひあるところなり皰は胞
胎の遺毒発すれば名づく皰或は疱に作る又痘といふ痘はその瘡粒だちたる
豆に似たれば名とす和名抄に皰瘡は唐韻云皰防教反面瘡也類聚国
史云仁寿二年皰瘡流行人民疫死云々皰瘡此間に云裳瘡もがさは面瘡にて
面は読て此面彼面の面の如し俗はすべて伊もといふ即其瘡粒だちて薯蕷の
膚の如くなりたるを伊もといふなるべし又阿婆多といふあざとくは瘢瘢なるべし欤和
名鈔に瘢晋書云趙孟面有二瘢疾秘反師説阿佐　亦白瘢病源論云白瘢
一云白電云云今俗にしらはたといふて亦名瘢肉典云瘢名波太介瘢音
病源論云歴易は奈万豆波多　以上瘡の膿汁なくして斑点をなすものは和名とする
波たといふの證にて奈万豆波多は今俗にいふ奈万豆といふ痘瘡の瘢を阿婆
太といふも阿止波多を略しゝもの欤亦阿止波多にして瘡の跡といふ義欤後
瘡氏の病因考に痘は胎毒の時気に誘はれて発するものとす方書に出生のとき
悪血を飲るそれが胎毒となるといへる理あるに似たれど又袋子といふものあれば
云ひ胎毒なしといはん欤されば此論はなし其児悪血を飲ともまた
生出たる又みなあらずといふて便にかん欲れは悪血のごとく下るべしさらに胎毒
しかるにものぞといふ事は十箇月の間胎内にありて甚蒸るにありて気血とともに
あるべくあるゆゑこれを胎毒といふならば毎人その毒ありその蒸るところの
気血後に発して痘となることおぼしかれども痘をせざる人あり又いと軽らかに
其痘なるを覚ざるものあり彼蒸る気血人の府蔵経絡の間にかくまるくあるか
後に天行に相和して痘をなすとあり故に痘ゆゑならんとおもひしかれど其膿

仕よする処悉あつた血まあらぢとうた血も津液もあつたものよ化とられて膿よなるよう
ゆくと原あつた血のあらんまい発ざるうちもあつるべた該るれどもさるのうざる
その時気をうらざれが発せざるものるれがいかり故よ疫の流行と流行ざる年あり
ちれ時気ようりて寄びいさるるものるれがど五嶋平戸八丈嶋るどおてい疫をちべと
いうり書ものそも上代まいのうて後漢の時北狄ようりうり来りとりの本邦ゆ
もびるくまいるーちれが呂胎毒のちるあらどが疫気ようるゆ分ぬるりとりのれが
疫も亦一種の疫ち和漢ともよ上古いるくて今盛よるれるも怪ー花い麓ようり鹿を
ゆ紅葉ハ峯ようり色ほくがどく倣初の流行風るども或ハ西ようり東よ至て或ハ北
ようり南よ至るをるくらるる天ゆの疫気当初夷狄よ発て唐ようり及ー遂
よ 本邦よ到ゆるるべーゆれが五嶋八丈嶋るどよいるどの時氣の行んざる
ようり後の世まいるざるべた麻疹いたへるるしゆ遅ようりるくいるるがさとりの
ようり衆花物語を撰ちて萬壽二年よちゆて流行をとせるいひ傳ゆどた



ちるざる欽衆花物語峯の月の巻よとちれる寿二年 あるるるさとりのいるるて上中
ハ三ちべ女ちのるるちゆのちべ女ちるぬんちのちべ女むるり内東宮もりんのちよ
るどちるゆ女ちゆのゆべたれとーどもるそるーちゆいとるるちるるいるーこるべ
ゆちる云云ちるちゆるるるゆの此ちべ女むるりとりひ且ちの奇病ちるれたるるれ
べられちり先ち麻疹の流行ちーゆ一度もるるるべーられるるるるべーられる世俗い
呂疫鬼と痘鬼をのちいとるどちるーーを物ちるひのちれどもるるべ麻疹の鬼あ
ちとをいるどるりるち麻疹いたるる遅く今も二四十年ち一度るるべい流行
ちべるるゆちる人ちの邪鬼を祭ちるるるべー 本邦の俗習往昔い殊ち巫覡を信
ーるる病るるりゆるるーー祈禱を先ちるーーー茶餌を後ちんーられちるるる
麦ちり孔子疾ー病。子ー路靖ー禱。子ノ曰 有ー諸。子 路カ曰。有ー之。誄ー
曰。禱ニ爾于 上ー下ノ神ー祇ー子ノ曰。丘之禱ー久ー矣。聖人いるちるるの生
ゆを禱ゆるるる病るるるる列ち穢ゆるる及ゆ尼夫い常ち利ちるるるるる

禍を避んとを求む佞よ常よ禱らば〳〵病とゝ甚〳〵禱る鬼神を事
さむるべき時あり凡夫その我私をもて〳〵媚へども鬼神いろゞゝられを受のん
君子よ人よ媚へどとをもて〳〵人の諂へを欲ども鬼神は明まてゝ〳〵邪正を鑑る
ものゝ〳〵婦人の情をもて〳〵人を憐そその媚ひを欲ゞ何をもて鬼神の德
を称ん夫鬼神は陰陽造化の迹とられを人よられい父母より死生と邪正と
人の吉凶善悪より鬼神よ又邪正より疫鬼疫鬼は邪神と人られを讓ふべ
られを祀るべ〳〵どられを祀る媚るのこ孔子曰。非其鬼而祭之諂也。論語 哀公問於孔子曰。夫國家之存亡禍福信有命乎。非唯人也。孔子對曰。存亡禍福皆己而已。天災地妖不能加也。孔子家語 られよ由てられを考へば天災地妖も又禱る所るべいろゞ疫鬼よ諂へべ季路問事鬼神。子曰。未能事人焉能事鬼。敢問死。曰。未知生。焉知死。論語 世俗人よ事ることをもて〳〵どもて

鬼よ事んとゝ生をもて〳〵身後の苦樂をいふものい惑ひ極まり子
貢問於孔子曰。死者有知乎。將無知乎。子曰。吾欲言死之有知將恐孝子順孫妨生以送死。吾欲言死之無知將恐不孝之子棄親而不葬。場不欲知死者有知與無知。非今之急。後自知之。孔子家語 聖人世のなよ知るものく知と不知とを説ものゝ亦不語怪力乱神。祭如在祭神如神在。孔子曰。吾不與祭如不祭。論語 聖人い鬼神を祭るとい神をもて〳〵ものゝ〳〵ものゝ〳〵ものゝ〳〵ものゝ〳〵
らざるが如とより世俗いもて〳〵ども祭祀祈禱いもて〳〵ものゝ〳〵浅屠巫覡よ任〳〵
〳〵られを多とられんや事るとゝ父母よ事るとゝ重ものゝ〳〵ものゝ〳〵ものゝ〳〵
多るとゝ大ものゝ〳〵ものゝ〳〵を祖先の墳墓へ詣ゞ〳〵異國の鬼神へ日本
〳〵家廟の塵埃を拂ものゝ〳〵邪鬼を事るとゝの唐山もゝ〳〵ものゝ〳〵

うし皇例翁の隨筆に疱瘡神といふは唐山にもあり留青集に疱瘡神の
社を建立とゝ化縁の疏を載たりとゝ是和漢の俗習同病なるゆゑその取捨
よ至てい愚がちる所よあらぬ

## 三 蟬丸 関東附

蟬丸のゆ世のいさめくよりあり諸説を参考るに天野信景の説を
据とせん欽塩尻云賞一ゝ明石撿校と稱ゝる氏物軍の親族なるこゝ
をゝり盲人歳ありとゝかゝゝ城オが猿宿聞雨の歌夜の雨の窓をうつみもぐ
天聽よ達てゝ夜ノ雨と勅号やられ後小松院の勅賜ゝとゝや盲人のと書るものよ
光孝天皇の皇子明を失ひゝゝ雨夜のれゝと称ゝとゝまで帝
紀を考るに光孝三十六ゝゝ雨夜とゝらん皇ゝゝ夜の狗の城
オがゆをたやされるゝや光孝帝を小松の帝と稱ん坪ゝよ号をわさと
ん後小松帝ゝ旅ゝゆをあやまり説をけゝてゝさゝゝがゝる例ゝ

蟬丸を延喜帝第四の御子とゝかの類ゝや延喜第四の皇子ハ式部卿重明親王
ゝゝちゝるゝ近曾伊勢の名所ともを圖ゝる草紙よ弦書考ゝゝりものを
引ゝゝ怪丸い唐の彈丸がゆを擬ゝてその名を設たらんとゝふう
を載たり彼ノ除書考とゝかりのいゝゝをもゝりげよ書たゝてせを
欺たるゝさんべその説ゝゝろ一ツゝゝ古書ゝゝるゝ況孟子齊ゝて
毒殺ちゝゝゝるゝどゝの虚言慢よ聖賢を誣たるその罪ゝゝゝゝゝゝ
草紙物語ゝどゝ雅俗ともゝちゝめゝり根ゝ言とゝれゝゝるものよ損益ゝ
ゝ偽書ゝゝるゝの欺をゝゝその説を信用ゝ又物ゝも書ゝゝゝその虚を
吼ゝゝゝどゝゝ亦人を欺くの識を曠ゝるゆのり畢竟奇を好むの敝ゝり
人のゝゝのゝゝるゝど吾倩もゝる悟常よある欽盡書を信ゝゝ書ゝゝよゝ
と孟ゝゆのゝゝと書ゝ愽く賢ゝゝその善ゝゝをゝゝゝを学問のゝゝゝとゝ
べゝゝゝゝよ記ゝゝゝゝゝゝ藏ゝるゝんのゝ

赤先達の號より蟬丸い盲人なりとあるべし後撰集 張部 よりの遊
坂の関のその詞書より相坂の実より庵室をかくまて住るまたりふしを
えらべとあるべ盲人なるべしを考べしといへ性なる似られどうや盲人
なれどとくかれうふ人の足音をはきこゆ今も園屋とする盲人あ
またくへのかるるのはうりなどのをはてそいろるるはめぞえもめとつを
るを笑ふなどめ〳〵蟬丸の盲目のるるふふりさうふたりふしを
えてとある詞書をまく盲目なるべといへいでみるれ
○附とりの関東とは逢坂の関より東をいふ東とは坂東とふも逢坂より東を
いるるれなるの義なるべ十訓抄より匡房卿とは蔵人なる内裡より
ろぼひあるれるをさる博士なれば女房達あるるてみものさるふふび
らそられをひれのへとく和琴をひたりれば匡房とるものべ
相坂の関のいるるもまぐるはびるるのるもあれざりり

これ逢坂の関なりこるる紙あべまとりふ種とるべしこの後ら古今著ず集
巻の五第三十に張るもえたり亦同書より 三條院の皇女前齋宮
内親王 道雅三位 伊周男 よりひ珍ひてせの人ちる移るるりまれが御べ
あるるれのひまりり三位は帥の内大臣の御まるれが致光ふ似るべ
あるれどもまべるるもまべれるるりふまるり三位は消息たるまらぬれ
べる判守をびしくなりられがよるるこの方のみよ
逢坂を東路とそ〳〵べしるるこのあるるそあるれ
この方清浦袋草紙巻の四るるえたり拾芥抄より三関は勢多 在近江国 栗太郡
鈴鹿 伊勢国 鈴鹿郡 不破 在美濃国 不破郡 のあるれど今俗は箱根なりこるるを関東
とも坂東とも呼るとはひ得れるりのあり箱根なりこるるをべ私るる
山東と稱べ〳〵

## ㊂ 悪禅師

義久元年正月廿七日將軍実朝公右大臣拜賀ありて鶴岡八幡宮に詣ず
る夜別當阿闍梨公暁頼家の子実朝の仇石階のほとりに窺ひまちうけ劍を抜て
公を犯しまゐらせ世の人公暁を悪禪師と呼なり蟠龍子が俗說辨に
ちれを拜して云ク君又讐不可與共戴天公暁は出家人たりと
いへども実朝は父の讐なりされば実朝公右大臣拜賀の夜世人悟らざりしことを
憎む悪禪師をのれとその名を負ちり凡智の決斷浮薄の至なりとの
論説あるは似たれども其を極めとしるべし按ずるに東鑑云摘要
元久元年七月十八日頼家於伊豆修善寺被害于
時年二十三亦愚管抄にも義時人をして頼家
を刺しまゐらせその喉を絞て陰嚢を抜てこれを殺しまゐらす
されば頼家卿を殺しまゐらせしは義時なり且ちなほ実朝は十二歲
なりしかども奸智の人なりしかば父を殺しまゐらせ計をめぐらしあるべ
き

公暁は亦又の讐をあらしまゐらせ繦褓の中よりうつ繦の褓をよくたくらし
うるべし加稱建保元年夏五月実朝みそなはす和田義盛して北條を討しあ
ひ義時はらちまゐらせ実朝をとりたてまつらんとす和田が軍累合期ちがひて
義盛一家滅亡しぬ実朝も又ちからなく北條をいかりまゐらせ
頼家に異なるべからずとの仰を実朝決しまゐらせ実朝は害しまゐらせ且鶴
岡拜賀の日身後の紀念とて髮の毛を抜て近臣に與へ給ひしを
小條が奸計を脫れ出てかくれ給ひしその死期をたがへるべし既に
五十の白石先生の讀史餘論を觀るにもちろん公暁は才淺く慮足らざ
りし義時はそのうされ実朝公を父の仇なりと思ひ給ひしかば
遂俗にて父祖の喪を嗣んとしたまへどもその行ひ孝なるに似たりそのまま
ならば慾なり時政義時ふたり謀て頼朝の統を倒しまゐらせども実は頼
朝の統をうけ給ひし公暁にしたがへば公暁も又罪あり天の照らしたまふと曇ず

る境の如く公暁ハ義時ヲ猶主義時ハ家臣ヲ殺さるるを是安ヨシ世
返るるの人悪をりるく公暁を学ぶみ赤らべすらど

## 四 正儀義隆 一休咏紆

蟠龍子ガ俗説辨ハ楠正儀足利家ヘ降参ちといふを誓の俗説
ゑり操狂言の浄瑠璃本ハ正儀南帝を恨こまとく武家ヘ降参とと
仏ちを実ゑとくとひきどくく世俗のあいのあらんとゑり曲事ゑる様を
ゑる正儀ガ南朝を去ゑ義満ハ軍ヘ参ちるハ奇誓の説よりべらのみ
細く要記桜雲記足利治乱記あるうえたり桜雲記ハ偽書ありとゑべ
井澤氏ハ取ざし歌細く要記ハ興福寺の実厳僧正ゑ記ゑる所ゑその記
記建武元年正月止永和二年十月奥福寺金堂の什物ありそのあるゑ
ゑ記ゑ当時の実録ゑるるりるる鏡とゑべく即左方ゑ参ゑる聊考證を

應安二年 南方正平廿四年

正月南方ノ大将楠左馬頭

正儀種々謀ヲ献ズトイヘ𪜈諸卿許容ナキヲ
以南方ヲウトンジ京師ヘ降参スベキヨシ内
内相約スルノ由風聞ス此間暑ス
五月二日云云去ヌル四月中旬楠正儀終ニ志
ヲ変ジ入洛シテ新将軍義満ニ謁シ南方ヘ服従
セズ其子正勝同正元ホハ南方ヘ忠義ヲ存シ
父ト不和ナリ云云和田和泉守マタ南方ヘ忠
ヲ盡シ正儀ト不和云云此間ゾホ暑ス
十二月上旬和田和泉守ト楠正儀ト不和既ニ
合戦ニ及ントス此間亦暑
應安三年 南方改元建徳元年トス云云 十一月中旬南山ノ新
帝ノ勅ヲ受和田和泉守以下官軍数千人ヲ率

楠正儀が赤坂ノ城ヲ奇巻テ攻ル同下旬和田
等が武威以ノ外楠スデニ敗北殆危シ以上細ヲ要記
ぶらり末應安七年の比より和田正武楠正儀正儀を攻る
るつゝえたり正儀再度敗北し細河頼之山名義理同氏清等数万人を
ゆるく河内へ発向し正儀をもとめ山もの和田泉州楠の一族なる
その太義武畠ゆゝ南方を護衛するよ足まりさんば正武世よあり此程
い南帝も安養よりゆゝ赤桜雲記より
正平廿四年北京應安二年正月楠正儀武家へ降参と告
同四月正儀へ洛義満入賜と
建徳元年十一月南朝の猛士和田某私云是則和田泉守正武以下勅ヨ應じて
軍兵を引率し楠が要害を攻正儀武家へ謀る故なり中畠楠正儀
南朝を背き武家へ降参ともその一族なる正成正行が遺訓を

聊もそむくべきすりて南帝へ忠を勵んと欲するのを此未畠ス
文安四年十二月云云南朝宮自殺楠二郎ホの勇士既ヨ敵を若干討
捕遂ヨ戦死と以上桜雲記
天正ゆゝ細く要記ヨるとあるの楠二郎とあるの正儀がる欠脱
正元がる欠たゞはべし赤足利治乱記より
應安元年云云同二年正月ニハ将軍義満幼少
ナリトイヘモ仁徳内ニ深キ故ニ南方ノ大敵楠
正儀等降参スベキ旨血書ヲ以テ依申細川右
馬頭頼之赤松判官等ヲ南方へ遣ス四月ノ末
ニハ楠正儀入洛シテ先細川頼之ノ宅へ向テ
一礼シ則チ三献有テ其後頼之同道シテ将軍義
満公ノ御館ニ参礼等アリ龍尾ト云太刀ヲ正

儀獻ス將軍甚秘藏セリ　以上足利治乱記

めづらしくえたりとて蟠龍をいとなみ戯曲を引て正儀が足利家へ降参せしを絶て久しきを論じらるゝ書どもをえざるまゝ千慮の一失なるべし正儀が足利家へ降りしと大塔宮の若宮陸奥親王の賀名生の奥銀嶽より都へ南帝を攻まらんとせし事正平十五年正月十八日の事赤松氏記後ニ千載のわざ人をして歯を切し明の謝肇淛が人の敝貌ハ天ニ受れども父子ゝ肖たるものあり必彷ハ人性なれども又子ゝ肖たるものあり必相似ざるべしハ人作ハ天ニ受たれとも世俗の常言ハ親ニ似ざるを鬼とハ人と鬼とハ相類ぶ牝父子の気相似ざるが如しこの説鬼神論とあり考べし

○腸胃弐部大浦義治の嫡男相摸守義隆或ハ義陸ニ作る法名行啓應永十非ずして辨を年四月廿五日相摸國底倉にて自殺鎌倉大草紙ニ息刑部少輔ハ一所ニ居あるを聞て自殺すると記せりてハ刑部少輔と称せるハ左馬頭義政の嫡男負方朝臣の子を養子息とあり再後ハ子息ハ同書應永三年の条の下ニ小山若犬丸一本犬若丸ニ作る非し左馬頭義政の嫡男負方朝臣の子を養子息とあり奥州の住人庄司清包を称して右新田義宗義宗嘗作義治の子息新田相摸守その後弟刑部少輔を号し大将と号し白河邊へ打て出る間上州武州より迎居る官軍の末葉悪く馳参りるとあり上の刑部少輔とあり何人ぞや称して後ハ子息と記し後ハ子息とあり負方朝臣の子ゝ肖たりとあり負方ハ刑部少輔ニ補せられ上ゝ子ゝ肖たりとの人義宗朝臣の嫡男ニて建德二年ニ正五位下越後守天授二年ニ後四位下の左少将ニ成りあり亦義隆ハ建德二年ニ正五位下相摸守天授三年ニ後ハ位下陸奥守右少将奥州國司ニ拜任せられあり彼義隆朝臣を鎌倉大草紙樓雲記および義陸ニ作る又浪合記ニ義則とあり義陸の字の訓ミチなるとあり

白石先生の記されしものをもて義隆とありげなる陸の字い人の名告る
歸し沈本ハこゝ隆を陸と悟まるるべし　貞方朝臣ハ應永十七年七月廿二日千葉效兼亂後七里濱室にて亦鎌
倉大草紙に新田左衛門義宗朝臣の孫子出家して兵部卿と云坂中と
いふ所に蟄居ありしを勸めて還俗させ本名新田六郎と名りて結城
遵へ討て出國中過半ちゝぶへ入り由良横瀬長尾但馬守持氏の方と
して十二月廿六日　應永廿二年なり　岩ーと合戰を云云この末に新田六郎のゆくえを
尋ねぶられい持氏その叔父新御堂小路殿　滿隆　并舍弟持仲上杉禪秀
由に鎌倉を追れ屋合戰して終に鎌倉へ入りあるたのゝ岩ーと云
治部大輔滿純のゝとの人い禪秀の壻なりしを法名を天用と号ん
實ハ義宗のゝ子なりしを特國密に艱ひて養ひ育ちら
い新田六郎と滿純とい兄弟なりとの軍記い実録なれど麗漏ふ
て考ぶるべきなり姑くとゝに秘して好古者流の考證を俟



南朝記に大德寺の一休とゝ申のえしい家ら　後小松の皇子な
ればとやしん腹に申ぐりのひーらぶ人民のまとりて偽こんなりなる
稱光院のゝ世ぶのことを義ぜいまて定めさるべしと
院宣ありしに私密言葉いおくて一首の歌を献る
常盤木や木末の梢つゝ捨ぶ弁の園いろえよ
さらぶとて伏見殿のゝ子なりしを院史餘論ふのを拜して
ちの家ものしりの人今も世の宝とまにて侍るものもあればさもあらや
とろられぞと記されたり南朝記に侍おる時の実録なるべとゝ説
られいぶ申るとゝ長尚石先生の解ま味ひありとゝろをはけ
ゝるべし

## ㊄ 八幡太郎

頼義朝臣の御子二人を郎を八幡宮の社壇に祭ぶ

二郎は賀茂の神社三郎は新羅の神社まゐえ服せさしめしかば七八幡
太郎賀茂二郎新羅三郎とぞうせと世よりひろく伝へたりそるよ十訓
抄に云後冷泉院の御時陸奥守源頼義鎮守府将軍従五位に舞さ貞任宗任
を責るよ永兼の末より度〻合戦ありけるに天喜五年十月より千
三百餘騎の兵をあつめてそひらせるよ貞任等四よ餘騎の勢を集めて
ちうと金為行が河堰柵よりもあつ見をあちだにめの時雪ぬり風ぐ〻
て味方の兵凍ぬれたるうへ勢もてよるうちたる両将軍のりさ大よ
破ぶてる者数をちらぐ兵四方よ散乱して残ところろよ六騎長男
義家後陣より進藤原景清清原貞廉藤原季範大宅光任藤原則明ホ
也貞任ぶ軍ぶれをとぐ責らせ矢をとぐ雨の如しそろる式義家
防ぐ戦ふもぐよ神のごと若少の齢ぐ大なる矢を射るその矢をおそれ
たるものうぐ貞任ぶ四重よめとる軍をかけ寄めて

おとこの中より出又内へ入ると度〻ありて稲光のごとく目を合るものの貞任
られをうつ八幡太郎と名ぶ云云とのりられを陸奥話記よ参考するホ
そのよりり第六張云同年乃チ天喜五年十一月。将軍率兵士八
百餘人欲討貞任等。貞任等率精兵四千餘人以金
為行之河崎柵為。拒戰鳥海干時風雪甚厲。道路
艱難官軍無食。人馬共疲。賊頼馳新羈之馬敵疲足
之軍非唯容士之勢異。又有寡衆之力別。官軍大敗。
死者数百人。彼軍長男義家。驍勇絶倫騎射如神。冒
白刃突重圍。呼中必斃。雷奔風赴。神武命世。夷人靡
走。敢無當者。夷人立号曰八幡太郎云云今按ずるに義家
朝臣の武勇絶倫ぐ東夷を威伏しめ凝ふべりぐ貞任ホその武
勇を賞嘆して八幡太郎と呼ぶようそその縛ありとのみ従へ記者の誤よ

するべし。果して如此するゝんとの賀茂二郎新羅三郎と稱するも亦別に
縁故なくしてなるべきに鎌倉管領九代記巻之四賢王丸云股の疵云持氏
の嫡子賢王丸殿え按の沙汰あり今の京都鎌倉確執とは軍家よりて
頼むべきものあらざるべしと八幡を郎義家の佳例に任せんとて鶴ヶ
岡の八幡宮に勅願賢王丸を寶前にあゆく加冠せしめ義久と名付のひけを
云云とあれば義家當初八幡宮の神殿にて元服ありて世人八幡を
郎と稱せしに疑ふべきに人の称号うどに成て牽強附會の説をなす
る事を好みの不為なる田原に近江の地名にて俵と書い假字なるを藤を
秀郷龍宮へ赴くとなれども米の蝶るを俵をはらひ世人俵藤を
と稱するなり古平記に云ふ又紀貫之い論語に予一以貫之とい
聖語を取るなるに貫之ちめの名い實字とのみ過て冠をかり
なるい邪此ことと教ふるに貫之と更たるなる物にて定いその字以ノ山

以定之に以ふに以ふにんとそもられるのみ地ノ世に信ずるに
らず史傳に餘文あり記録に紀繆あり況小說野乘に至ては事を寓
言に係らざるものなれば今古実の指ずれいかるる故なり

## ㊤ 淺草の事實

淺草の駒形堂むかい河のほとを正面にその圖說江戸名所記大和名所
鑑ホに云たり國いたもに墓出を紀にりとある便にちとかに名不詳みい駒形
堂と題してむり此あさくさ川のいにて寺追にの風に帆をかけてそこを
私中にり此堂をつくれば堂のうしろにあるかとにあるとこにあるに堂と名付くとい
とこの說にろいなど按ずるに當初の堂い淺草の觀世音にまるにる繪馬
をかけさせんとて建て馬頭觀音を安置したれば駒形堂と名付たる俚俗
い紀にて駒形堂と唱へたる歟さられ江戸名所記に駒形堂と記したれば
昔ものもいと物にたるに再按ずるに竹所の渡を黄い花方の渡といりたるを

江戸名所記駒形堂圖
巻之三第十張より十三張まで

江戸名所記巻之三 圖絵なるこ臨書代圖之者よりえたり

寛文二年壬寅五月京五條寺町河原道清刊行と全部七冊なり作者の名氏をあらはす此書東海道名所記と同作なり

## 立 浅草 駒形堂

駒形堂は浅草寺北門にあり一名観音堂安置せる所の安置乃至平地云雅乃至まつ不明の讃嘆潮の引くに従て浅草川の流れ所々に宮業絶相たちひい駒形堂北新ふ

ちめすちせの利生ゆゑて乾坤かぎりなく

宮ねて宮つき桜ふくびさく海

こしにちるせつ北半るべや佳人ちみして

まれをとりにすべ武力を手ちめ人北作さ

ずふくちして浅草



川乃舟つきめして手の京京ゆくものも

牧こをを舟つきとびぐむおる茶屋ある山川

乃郷ハ名物ふくふ北風味さべて宿舟海さ

ふり此川ぐふして奏とや

舟をあぶ北すぐにりきて駒乃

幸るととぐる歌書

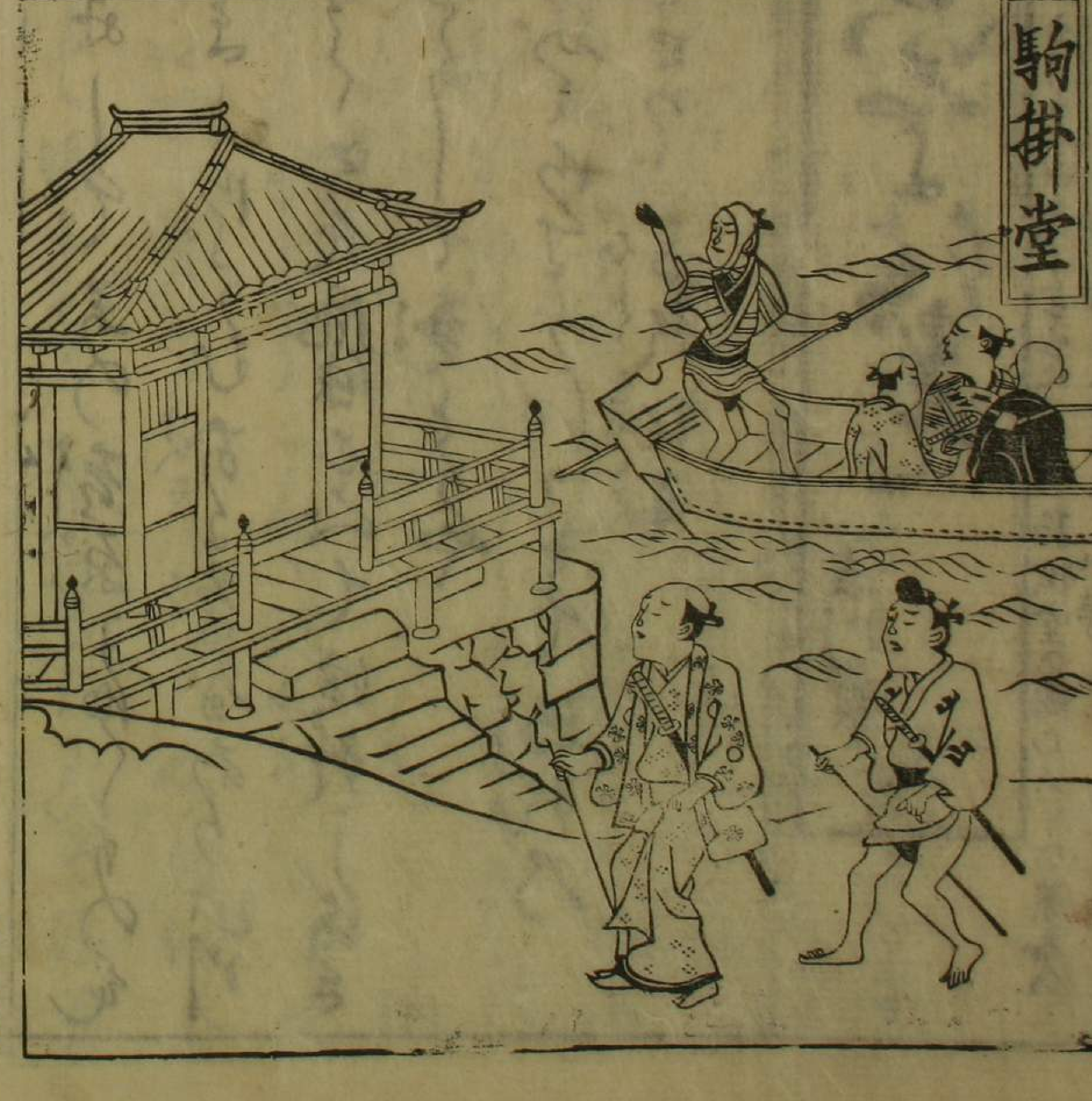

# 中國めい所記

菱川筆 上

此書全部三冊なり集中奇とすべきものハ駒形堂の図ごゝの茶屋の図六郷橋の図ホなり六々橋の景ハ五の堂くよ暮ゐん

●こゝにあさゝさ川
のこりとうげたり
ときにはりこゑ
けだしとゝりま
つち山いゝさ記こゑ
けはるんあ取り
むかいつてき観音
うりむりしはあさ
あさ川の口し守り
駒にてよはれ風に帆を
うけてそうは。船
中より山だしを
みまきハだゝれける
せうにみゆるさは
まよりくるゑけ
だりと見付とめて

駒掛堂



あさゝさらんさん
へさんけいのくろさ
おりとせちてめんさあ
にうの石よりふり
まのりて宮橋
そのうちくへ舟
射風をけしきれん
舟中へうけ渡さる
をみてなある
よめる
楽しと志まし八
人のころよも
かものぬに
うくころわも
めゆく神かな

大和名所鑑上巻 十一張ヨリ十二張ニ渡ル

並樹の桜なりしかバ渡ると云義をとりて花方の渡と唱へしが駒掛堂の方へ渡るといふ義をとりて駒方の渡と唱へし後に世にその堂を駒方堂とも唱ふなるとぞ近頃らの穿鑿せられし精細なる人ありといへども尋ねがたく殊に秘密せし江戸名所記ハ寛文二年に京都の書肆河野道清が刊行せしものなれど編者も画工も京の人にやありけん為に傳写の悞もあらん歟大和名所鑑ハ菱川師宣が画く所にして書肆萬屋清四郎刊行と發兌の年号ハ後に削去りしにや正月吉日とのみ記して詳ならざれども江戸名所記と同じころに出せしものなるべし何をもてこれをおもふとならば同書亀戸天神の図説に葛西の郡亀井戸といへる所ありちかき比まではへんへきなる原なりしをいまそて筑紫安楽寺の天神を勧請したまふとあり亀戸天満宮ハ寛永三年に菅原信祐建立とこれらの説によりて考ふるにこれその書の刊行寛永をさること遠からじかれ駒掛堂と記せしもまたその実をうしなはずといふべし

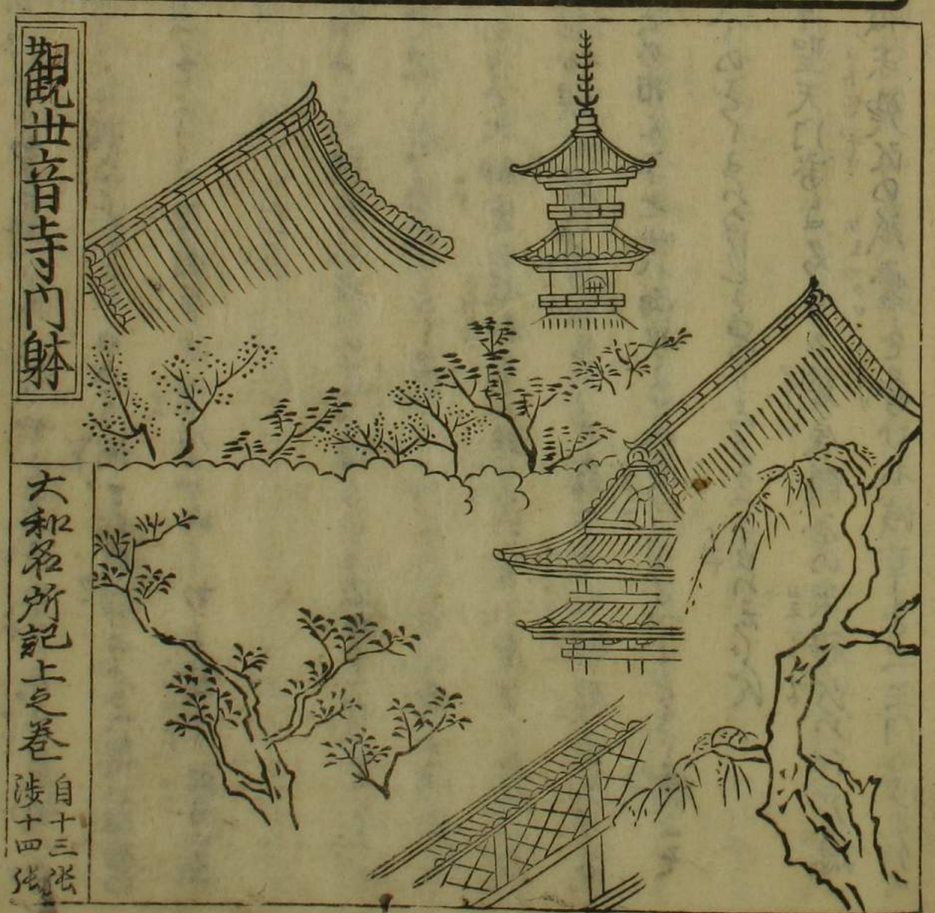
○今並木町と唱ふるところハむかし奥州街道なりしころ松並樹ありしによりてその名遺りとの説ハさるべからぬがごとし按ずるに彼処へ桜を栽られし比より並樹と唱へたるならん花川戸も畑なりしハ船川戸といひしも彼並樹の桜に因て花川戸と唱ふかへたるなるべし前にいへる竹町の渡の古名を花方の渡と唱へたるもまた彼桜を賞美せしものなりけれバならん亦御蔵前と唱ふるほとりに桜森稲荷と号する荒倉ありしも並樹の桜を栽られしころに勧請せしにや知るべし件の桜を當初世人の賞翫大かたならざりしかバ春は群集して長日の暮るゝをわすれてめぐりしといひ伝ふる寛永中の印本東めぐりといふ冊子に浅草並樹の桜のうたみえたり

或人云子が説のごとくハ駒形堂の古名駒掛堂なりしに其方へ来る渡とある義をとりて駒方の渡と唱へしならば彼堂の名に負し竹町の渡を當初花方の渡と唱たるは並樹の桜ありしゆゑなるの義とみえたるも杜撰

●あさ夕ゆかしき代のことどもさゆゑ世ごろうんくこそかぐやの形りきれハ人の心もすなわちありて仏神ちんくこしてあめこをくこぶ中にうけあさくさくさくさんせ者ちれいげんあらたまゝ世ハ二世あんらくをいのりこせんあめこをうすたんちるゆせりこぶけるくもはけるこんぶりあさくさ川の流き

より苔よりゆるるさなりあげのへいこんぶきのひりをくるちあめこをこんこ物をけ中よあるめのこそるこんこ新こ三こ社指沢とるみあぐめなる形り姥ゝ池山寺門のあるこぶくれちゆ屋あり仁王門のあるゆ雲乃ゆ和よいとここここれきれでけりこる

枝ゆ花や
いこれくら



観世音寺門躰

の説もあれど信用しがたしかゝる例なきにありやといふに予答て云吾妻橋は吾
嬬神社のほとりへかゝる橋なれバこの名あり例せバ麻布なる二の橋は國府の
ほとりに渡る所にて鴻の台をとりて國府台と唱ふるが如しかゝる類穿鑿せバ
いくらもあるべし

○毎年十二月十七日十八日にいたる浅草の市ハ新年正月の物を賣買するところ
なり仏閣にまゐりつどふものいとおびたゞしくこれを土老に問ふに
市ハ當初雷神門の左のかた大神宮の摂社なる蛭子の宮の市なりし往昔ハ
十二月九日十日両日なりしが観世音の會日には諸人参詣の老幼群聚するゆゑ市
の日もうつりたりといふはこの市を十七十八両日にせバ便宜なるべしとてつひにそ
のまゝを定めけるとぞ今のさまにはなりしと云ふありやなしや否ハしらず

○延宝天和のころ浅草聖天門前に名高き麓屋鶴屋の米饅頭ハ江戸惣
鹿子に載たり一友人彼米饅頭の紙袋を蔵む亦浅草寺二王門のほとり

なるふくの茶屋の圖説ハ大和名所鑑にのせたる因みに云ふ莫者出ちりあるに
人々の圖を見るに云ふ當菱川師宣が畫るものをみるに武士編笠を載たり
長刀両刀を帯高股をあげりて立たるもの又その圖ありこれいかなる
故ぞやと人問ふ予答て不及坐右なりける昔々物語をかし披見てさし
示せば其人忽然と此ぬ昔々物語二の下巻に云往昔ハ往還する侍衆上下を着し或
ハ袴ばかり着たるも大かた股立をとりてあるけり馬上の人も股立とりて馬に
騎たりうへの三尺手拭にて鉢巻してぞ往還するもあり今ハ鉢巻して歩行
人もなし下々も侍供まはりも独ある時も股立とりて歩行中間ハ独使にゆく
にも尻高くからげて歩行しが近年ハ独ありくに股立とらず尻もからげず
同書上巻に云女ハ外へ出るにかならずしも覆面の上にたゞ帽子をとり編笠を被
りしが寛文のころまでハこれも編笠を着たり万治の比より玉渕といふ編笠覚え
のち松坂といふ笠延宝の頃熊谷笠虚無僧などにもあり八分等もあり天和

貞享の比より編笠比丘尼止て皆一同に菅笠を用ゆる云く菱川が画いまるもこの時勢なり

## ㊐ 地名の紀譯

東鑑云。建長三年三月六日。武藏國淺草寺。如牛者忽然出現奔走于寺于ン時寺僧五十口許。食堂之間集會也。見件之怪異。廿四人。立所受病。進退不成吊風。七人即座死。曲亭子云この說よりも後世好事者葛飾の牛嶋の祇牛の出るなるべしとこれとこれとの牽强附會の說なりこの辺なる牛御前の神社を一鄕の鎭守とするなるべし牛嶋と唱るなるべんたらんウシヘ毛蟲の千ゝあるべし大人の義なるをもつさるの東鑑さくとり出さる說を

なるべしと牛御前牛天神の牛は昔まさに大人御前大人天神なるべしと古人も考へられたりと

○江戸砂子の說も亦紀考なり築土の神はいるどもらが產砂よりしかるに平第十二考一篇を著さゞやとなくども事長りれば築土を將門の神靈と云ふ說を

是とやうに白ろゐなべし道灌は清和源氏之後入道頼政卿の裔と且その主たる窮谷定正は將門の末裔姓氏たれば平氏たる將門の末を奉りて城隍廟とせばなるべしと例とせば神田明神のごゝ祢門の末いかゝ世系のなめの欠

○本鄕なる圓山とのゝ處は古名多塚なるべんとその豊嶋平塚多塚の後はいまる一族なるべしなるべしかるに鎌倉大草紙をもとゝ今弱迫のあるべし平塚明神なり但多塚とあるべしなるべし但跡をたゞに大塚は廻國雜記なるべしと今よりその地名を存されべしなるべし今の駒込の駒山いむかしの圓塚なるべし後に胤を更めるなるべんなるべし

## ㊅ 四時代謝

百年前のなるべしとなるに碑を作るのを雖ども眼前なるべし說なるのなるべんなるべし人の我も推量

の說のそうれば孰を實事う孰を虛言とせん三四十年このうちのわかう親
くうとしやのもろうあるう春の花い秋のりみちよ深りんうう葉ゐん夏ふを
雪のふう峯とうりそ色ろのみうふぐ四ッの時のうちもくまくまと目ゑるへりも
ありり明和安永の間ハ物見遊山とだるうべが大ううい深川洲崎ゐる潮濱さえ
そと真崎ゐ稲荷ゐうどく人の詣るゐりるそ予もいこけるれこれもぐぐ又の撰て
詣めひーが今い昔ゐも似ど潮濱ゐる大りん在とはえーも跡ゐくゐいたるゐや出崎
ゐる甲ゐ在もりうよ形ぐうり殘ゐう新大橋のうゐくの岸を築出されくうれを中
洲と唱夏のうりんをちちちん人うゐ集合て凉とる景迹りのべうもゐうど茶店ゐ
ぐい葦簀立ゐぐう汀屋へめりゐぐたる百をりゐ數ゐべー燈ーたる挑灯を
りぐりゐをりんうれをむうひの岸うり眺をれい尾張ゐる津嶋の紙系ゐると
ちちゐうり凉紙殿出ッ高尾丸川一丸吉原丸神田丸ゐど唱たる樓紙いさう
ゐり屋根紙猪牙ちうゐどりん紙ども虜れ汀ゐそよ不せんもぐうべつ花火



賣紙ゐり酒賣紙果賣紙ゐり糸竹のちぐべい水と陸とをひろうたる小唄伊
猫姐水撥関ゐり物まねをる乞児ゐ足をとぐめられて觀るゐの小夜のふくゐを
ちぐべ俠儒い前ゐる火をとをを罵ま稚児い親の肩ゐ騎られさも賞れ
汀風の鉄吹へるくをちちちぐどくく玉の汗拭ひもちぐべ塵埃ゐ塗ゐ内るもりを
りり四季菴ゐちのひー酒樓い新大橋ゐり西ゐる出崎ゐりん夏をりゐとする
樓ゐ四季と名ばりりいりゐる意ゐうりん四季とい寿の季ゐ夏の季ゐ秋の季ゐ
の季をりゐぐりー春夏秋冬の気ゐうぐべ四時とそいりめちちりえうさせい花
火の紙ゐ刷りつゐさー龍勢虎ノ尾星てうるどりゐ花火どもをいくつともるくゐび
りり岸と橋とりつぐるりろ人ゐる玉屋鍵屋とほむる行ゐゐぐくそゐーも
滅ゐる星隕如雨とりゐぐ左氏もうれが傳を仕を杜預もうくび注と図昔
慶長年間夏日の炎暑ゐ苦ゐるりろ人納凉の為ひらく紙ゐ屋根を作
ゐりりさーとれを帶ゐさー浅草竹を乗ちりーりを紙拵ひのちぐゐ

と昔く物語にいへる事 同書亦云明暦三年の災後三四年が間船遊びたえてせざりしが漸く至りて又納涼船を造り出しけるが人亦これを借りて五月のあさき委ぬ且災後の艱苦を忘るゝよりてこのみよしとすゝ人多く船のひさしを設けてあり行は船中凡才に文字をかりて一丈七八間の楼船を造り後にこの船の名を川丸関東丸大関丸山一丸十間一丸など云けるし山一丸は八九間あり然一丸は十間あり市名は十一間これらは主従数十人乗るゝ舟當るべし二丈を作くせり云云 亦寛文のころ三股の涼船

とゝ世の口碑にのこれる亦両国橋の夕涼は今猶毎年にかはらぬとこの中洲に比しく二の所なるべし今は人のこゝろいよ〳〵新しくなりてよろづ質素なれば此夏の暑のがれといへども楼船などは稀にて亦宝暦の末より明和のころにて巷路を飴賣あるくものに土平といふありけり予が五ツ六ツばかりの頃はよくあそびにまれどある頃土平〳〵と唄ひ出きて来たり飴を買んと云ふ童に其ものが像を画たる小さき紙を板にて摺したる紙にかたるをあたへけり予その一枚を蔵めて置しが周に下の墓所を雲の土平は眼鏡かけて声いと鋭たる年の齢を五十あまりへなるがとぞありける土は五行の一つなれど人の名とするは稀にて天正年間山なにがし土佐と云ふあり室町殿物語にみえ出たるのこる亦三州に天

津土佐といふもの有り亦享保年間相撲取に鳴瀬川土佐といふありけるも猶なほあるべし安永のはじめ頃男と女ふたりにて唄ひながら躍る飴賣ありけるも人の多あつまりて童わらはもよう〳〵に遊びたるのち亦おなじ節とて小唄をうたひ樽の浅黄なる頭巾を戴き腰衣まとひ鉦をうち二人して一桁の擂をさし擂ひながら街頭を賣あるく飴商人ありけるそれは安永六七年の頃とぞ其此のちも又かの駒飴とて飴賣る箱を肩にし髷をいと長くしてて蜻蛉のとまれるやうにしたるもありけるとぞ又堺町なる操芝居にて昔八太夫といふ浄瑠璃節を語るものにありけるが世のうつりかはりのころ其一句づゝ口吟るをきゝて世にもてはやされたり檀那が嫌ふて膏薬賣は明和の季より阿蘭陀のおしへとて糖朝鮮のとらけいし安永のころおもむきあるべし扨て寛政六七年のころ粟の岩おこしといふものを賣たる外にも人のいひつたへはやりしも稀なれば忘れぬも多かれども久しく巷路を呼ばふるもいと銅線賣の鋳あり評判の焼といふ童のあそびものを土にて造り二尺

ぎりある片竹の中まで拾ひつ賣あるたしも字へ絶たる亦宝暦明和の
間軍書誹る志道軒安永天明中に至て馬谷落語石井魯石あり
ちりめん縁手間をとる名たる臣長谷川町ある鹿狩武左衛門横山町
三丁目ある休慶中橋ある伽羅石小左衛門宮前狩ホ町ほ狩らず
されいさく人耳を側頭を解ざるいろ志道軒予がつとめるまゝ
没ーたれいられを識らべその没年墓碑ホを友人の一考あり既に草
稿もとゝいらるいる已つ魯石八享和癸亥年冬十月ね

◉諸國の灵佛凡夫を誘引ものの大江戸まで行かれ物ものいづれも蹴ある
あらざれど明和七年の夏洛北嵯峨清涼寺の釋迦如来回向院まで
ちがれの行ものいろ雨気ある暑のたゝをりのもゼど結
縁のねもとに未端の老弱ゝ億万人とゝをたゝび予いろ四ゝのと
まで奴隷と貧乏まで寄りなるがあり根深の麻衣のもものあり汗よ出され

奴隷がゆんでんの紺ちりて黒くなりたるを六ツ七ツのちゝよりとを分も
ちれねど寄已ものいろもおぼろ安永五年の夏麻疹流行ゝ胞又
手枕をうゝべられゝと廿八年を経て享和三年の夏又麻疹流行ゝ良絨
脱ぎるものゝ予が四たりのすゞもらもちろゝ病るが幸ゝ差ありれ
ちゞ彼疫のイキりたる中一とをちゝ安永七年の夏の頃信濃ある善光
寺の門跡如来ちれも回向院まで行ものゝ近在を郷ゝ出さゝ被此
ゝるゝれものゝ老ゝるものゝもあさゞれゝ行ゝ見ゝ大念仏し
寄ゝ物ゝ暇ゝ寄ゝ物ゝ寄ゝ物ゝ両國橋のゝゝゝ
ゝを物灵ゝ出ゝりゝんだ灵宝と名ばけて乾魚乾物何られゝ
ゝりめゝ佛を仕ゝ宝或い鳥獣の形をかをゝゝ亦悪姫
と書たりる懺を建ゝゝどのゝゝ人ものをみと亦千年ある魑
魅ちゝものをゝたゝり世俗い祀ゝをゝぐらゝゝゝゝものゝもゝゝり

それは本郷なる大根畠といふ処の商人が糀の室にてたくはへたりとぞいふ事ありし五月の頃三崎に角ある竹の子生たりとて人々なみなみならずめでけるまま木挽町なる勘弥が芝居にもとめられてさらしおくに二ッの不思議をならべのせたりけり竹の子はなかなかのよみたりけん三崎の四角竹の子千年の土龍畠に動弥大入り例の人の癖なるべし彼角ある竹の子はちがひて土を出るときより細く穂うち敷きたりしとなんいひける丙寅のとし豊嶋郡小豆沢村なる農夫某甲が圃に生たりといふ八ッ岐の孟宗竹もその類にやとおもひ出して清涼寺の釈迦如来は天明五年の夏亦享和元年の夏もうつして回向院にて開帳ありしなり善光寺の阿弥陀如来は享和三年の夏浅草寺にて開帳ありしなりひとついづれもその日のよびものにかざりてその余りをかぞへたちて書とるさへ年代記といふもののめでたきものにさへ此あたり低く成りて出せし如くなりけりなるは和年間葛西金町なる榛田の稲荷谷中なる笠森の稲荷なりとぞ

予が祖おぼえたる天明年間よりは比門谷なる執金剛神二王とふるなる世俗これを雄屠なるらん甲子の年浅草なる太郎稲荷へ来らぬ人もなかりけりとおぼゆなるといひしは寛政十年の五月品川の海へ鯨の流れよりたるなり海鰌録といふものもこの時に出づ大なる鯨志に似たり鯨の形画かれたる図説など多く競ひて弄ぶ浅間山の焼けたる事は諸国へ砂をふらしたるは天明三年の七月なりしとぞ好古日録にも載たり因にここに又いふべし大約高山を浅間と唱ふるよしは浅間は朝隈の義にて朝日を背なる伊勢なる朝熊山も熊は假字にて隈なり亦筑前并に木綿間山あり是も夕隈の義なるべし説文に土山曰阜曲阜曰所といへり曲は阿也和訓久末なり又尒雅に凡山遠望之則翠近之則翠微故云翠微といへり是山色を見て遠近をいふの證とも見るべしされば朝に隈の愛たるを浅間と名づけ夕に隈のめでたきを夕隈と名づけ

以右為上

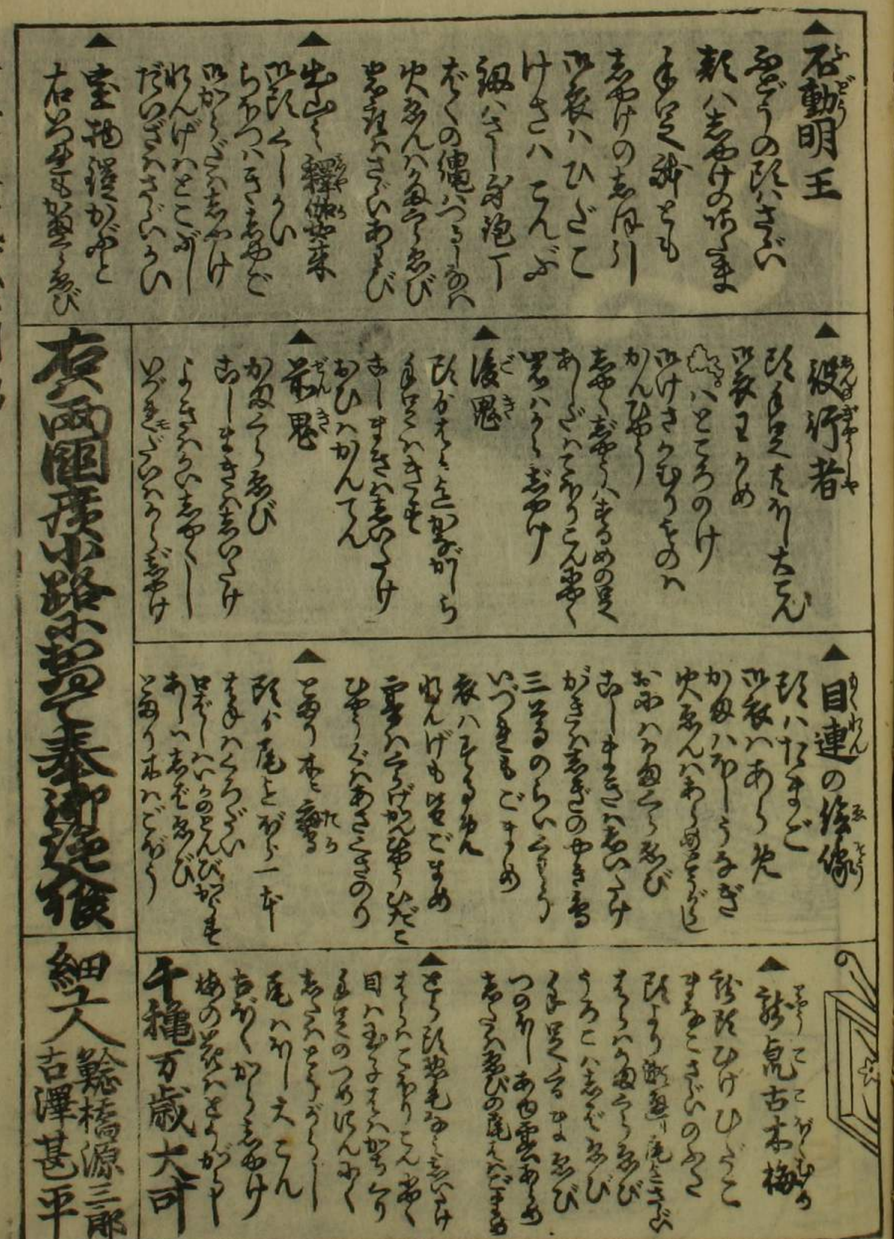
かくらびするものを飜刻して世に傳んと人のいふ
あるひはこれあまどかさなりとてよくしるものをおよびけるか
ゆゑにびんぼがいとあやしくも興あることゝなりとて好事の
雞肋のみ所謂燕石なるものなり

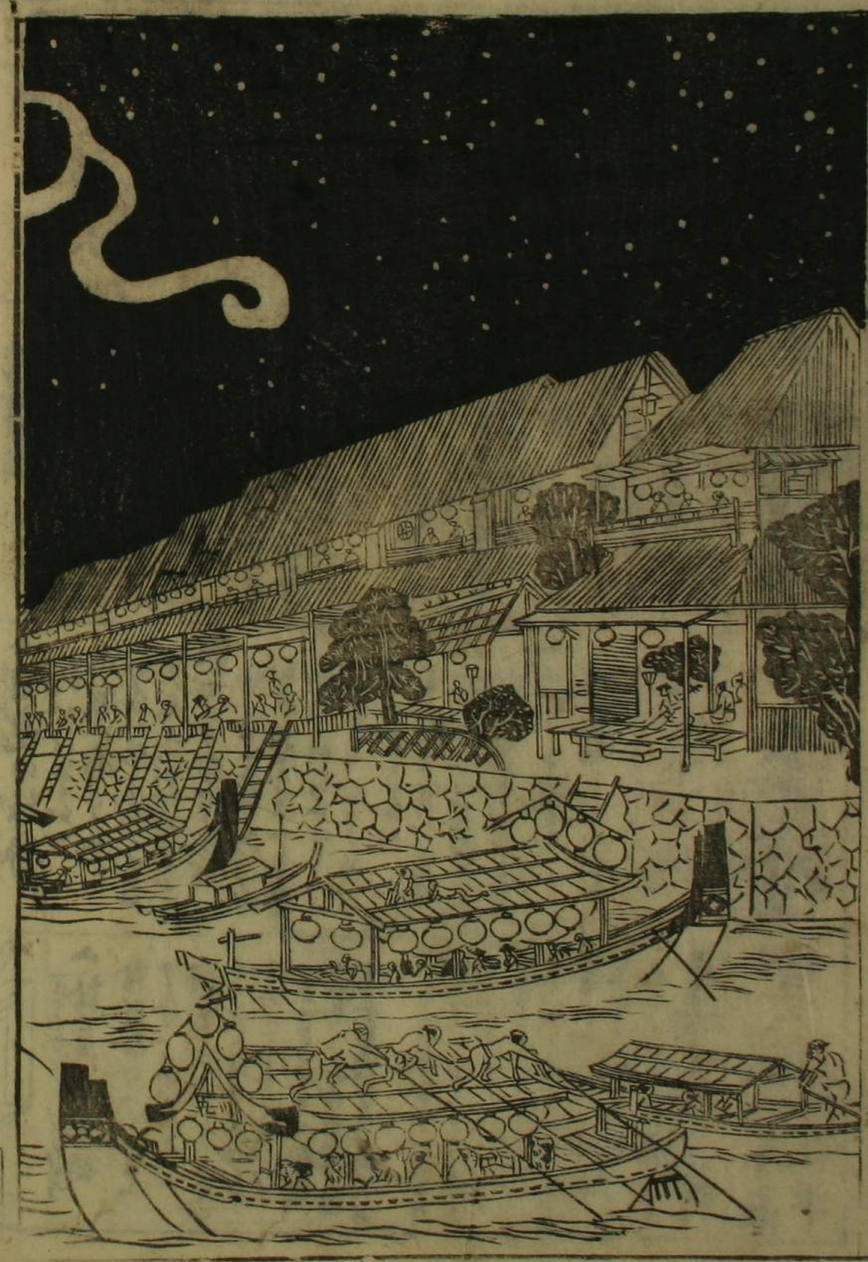
江戸中御評判

▲いくいいつぺんいろくのい
一ふんでるまのまねこつま
一それおかさんをぬんん十三文んに
▲せんずのくだいじのおなんのある
ゑびす一ぱいさあくまえてかなまそつ
かゝさのでおぬりちうりふじ
ふれだまへの福こめちやうをと
るこふきてやつさ三でとそぶそ
まいとちうりぬさんまよのせ
ぞうくく
▲どうくとやさとてあぜちう
なちやるおざへもとくい
とさやいろおせこさんま
▲中あ福ずめこさうくした
退八おまくのえむがよいさ

いおやんり
んちやうまんいらくいらざいするで
くいさうばァうつけェそうちん
ちんをやつ 三文ちん
とかく
よのせぞうくく
うずんのやまくふうぞんいらやよ
んまよのせぞうくく

開帳佛
細工物
とんぼぎれいへやう
細工掛宝物目録
▲三尊佛
▲目連の絵像
▲誠亮古木梅
千種万歳大可
細工人 鯰橋源三郎 吉澤甚平


▲石動明王
▲釋迦如来
▲波斯者
▲後鬼
▲前鬼
▲目連の絵像
▲誠亮古木梅
安永七年戊戌六月出
奉御免
細工人 鯰橋源三郎 吉澤甚平



浮繪東都中洲夕涼之景

北尾政美画　板元通油町　鶴屋喜右衛門　蔦屋重三郎

さるなりこの山かの〳〵高山なりとも気に隈とりふ小山ふハ隈なきことなし
いまだ雨後をしらざる人の為にいふのみ 亦安永年間下主などハ髪の中織剃ひろげて鬚
を鼠の尾ほどのこし眉さへ剃おそめて額ひろめてぬれあげたりしもおぼつかなき程にて今ハ髪の中
を薄く剃らば額なども狭くすの稀なるぞ愛たれ今こそあれ後々に至らバ必奇也と
あやしく人の嗜欲も十五歳より初老に至るまで十年毎に一変せ始に聖人
ニ三びそのいましめを異にしめしたまへり 況て恒の産なれば恒の心なしと
と孟子ものたまへり一挙して激すれバそのハその悖を改むるにあり 侠客などのあらひハ
髭或ハ背へ花繍といふ事をほりて老髭まで其の子その後まで迄を引れ
のこるをしらざるなされど生まれて父母に受たる五尺の躯を汚さずといへるを
ましてあやしくといへバこそ老ぬる時にをいてハおのづから血気によりて悖をしらぬもの
あるべし亦老たるものもたらずしつかなりてのちなる人も稀なれバまれなるうち
あるなりちかしこの類なしを数へたてハかぎりなく責のこるもあるなれバ

偏痛れいざなりし只それもあしきもいふべきに有りとおもひて教んとの旗
ともさふたるを町とまざらん 今の老人ハ昔鶸茶柳茶親和染などのふ花に
ある衣を被て緋紗子の帯の幅五寸ばかりなるを志てるもあるべしされバ今の
壮俊ハむかしの壮俊より老実て固に五十年が程ハ一睡の夢の如し限ある
浮世の旅なれど今に生をうくるものハ轎に乗且馬に乗せられて老の
坂に登るうちんいと有りたる傀偉なるとやミ子世界のらくし住よしなんぞ愛
たちぬハあらざれど凡天のおほふ限至地の載るところ大江戸にまさん
ものハあらじとおもうさんも猶町とあるべし

## ⑨ ころびたる町

飯田町の東南の盡処より小川町のうへわたる橋を組板橋といふよし江戸砂子
に記せし悖をしらでとなきるものさへたる所なるなり〳〵まとまる板橋と
いふハ九段坂の中なる十字街を町のうへもなく大廻しきく匠石橋をいふて

本石 桜井町にある同名の橋なり 今俎板橋と唱ふは本名新橋にして昔よりこれを俎板橋と唱
ふるは絶てなし昔菰が淵といひし所は彼新橋の南の岸をいふなりと今はその
さかりの人さへ唱忘れてその名をしるものは稀なり赤坂の南北の盡処堀留と
いふ処より小川町の方へかけられたる石橋を蟬橋といふなれどその名をしら
ざるものおほかり今いふ九段坂と唱ふる処は舊名万年坂なるよし古老いへり寛永
中の地図を按ずるに町家は今九段坂と唱ふ処よりおりくだりこの町家を後
小栗地へうつされて元飯田町築地飯田町とよばれしは九段坂の上は寛永の
ころ飯田口と唱たりしの飯田口のほとりなる町家なれば呼て飯田町といふ
なり慶長年間飯田某甲開發せしと土俗の口碑に傳ふ是不は知らず實に
しかるべからんかはそれでもその活業せる往の後は家を化にせむ
あるべくもなきに慎みて舞馬の災あるにあはせず朝く後くに死んとぞされ
するべしかし僅に百四五町の処だに土俗の謬傳のみかくまたあし古えをしらん

ともかくもの奇書珍籍の殘りしを見に倦て中途にして廢せるもあらんより
てしかるに江戸名所記江戸雀江戸惣鹿子江戸咄ホ大かたは麁漏にして中十が
二三をしるすに足らず当時印行の地圖などは明暦前後のものは究めてな
からし延宝四年の印本江戸總鹿子に載たる菓子所の部に飯田町に虎屋
柳屋壺屋ありとのうち柳屋と唱る菓子店今はなし生薬舗には柳屋と
いふもあれどその蹟にはあらじと彼壺屋の暖簾は延宝年間駒込吉祥寺
にありし副司を勤たりける高甫和尚の筆せるところにて假名にて横に
つぼやと書たる件の高甫和尚は飯田町中坂なる松屋權左衛門といふ染坊の
先祖今の權左衛門より五代前なる權左衛門の伯父なりしの所縁によりて同
町にてしかも近鄰なれば壺屋の暖簾は松屋より頼みて高甫和尚に
書しなるが今はその形をのみ染るよし彼松權の老店なる白養隱居いへり
又高甫和尚を八百屋お七が手蹟の師なりといふ説あれど附會のことなり

おとゞ菩提寺ハ小石川の南縁山圓乗寺なるよ吉祥寺なりとの諺伝を
受て問る説をなんまことに予なるをを向難老人よ問しなるをいはゞも及
ずと答たりと
周よいハ服部子遷嘗唐山の飯顆山を飯田町よ移せり諸伝のうゑハ考る
べし雅文なりとも地名を私よ改んるハ古実よ稱ぶ量蒙こゝろ得ぬ李白が詩
よ飯顆山前逢杜甫云云の七絶あり人の考るべ所なれば載せず
(1) 牛込駒込長禄長享の比ほゝもえたり往古牧の迹なるべし信濃なる
新町牧の迹なり目黒目白目赤ハ往昔牧の駒を出せりその色よりと名
とんと但未詳も既よ載せり載せる不岐藏國勅旨の牧五所の牧亦兼平官符よ
八月十三日ハ我父の牧北八日ハ同小野の牧の御馬貢ぜとなえたりとの外なり
私よ雑なくなる牧駿河りん煉馬も牧の馬を騎なるなる所なる俄草ゑ



る馬道ハ昔土よ馬と唱て北里の蝶客馬なるをめるひしなり名とハ
なるハ牛込駒込とあるゞりなる牛ハ渕ハ車牛の墮たれば名とせるとあるさる氣
ゆゑ今も九段坂ハ車をひくをを禁ぜられる本所大竹邊なる駒留石もその縁
故俗伝のごとくなるハ考正なるべ追書なるべ
○落穂集とあるのよ富澤町ハえ和年間考澤とあるの開發なるべ
考澤町と唱て後よ富澤と書更なるをを繆伝なるべ寛永
中の地図をなるよ今富沢町とあるの処ハ尾張町とあるの次徐宜町今ハ長
谷川町と唱ハれば落穂集の悞をなるべ亦通油町と塩町の間ハ
翠橋も寛永の地図なるなる今の通油町なる南の隅なる堀留なるのなる
なるべハ今の大傳町三町目ハ通油町と又今の通油町ハ塩町とあるなり
明暦丁酉の回禄後なる遷る寺院を他処ハ遷されて時所割もあるなる
ゆゑ今のごとくなれるなるべ

○ゆさけ元　御代の長久なる隨ふ物ども〻今大江戸ふ甚足ちざるべき
ものゝ神因の効進能明神の社地ふ說経座堺町
ありとらんかふ
八芝夫　耳垢取　名を長官といふ神田絆瓜町
三所月さまれりと江戸總戯まみ出ウ　獸の藝鑑帥　水ものゝと稱く陽鳩天邦
あるをれやと同書ふ載たり　彼
衣ものゝ女子野呂間人形つゝひ碁盤人形ほゝひ山猫まゝ〻ものゝひわさめも
たゝとゝ治主太平記ふゝ　街改ふ立ゝ〻ものゝ　唄比丘尼五月の菖蒲人形賣扇の
地紙賣奉書足袋賣　紙ものゝ足袋をつゝゝ　ものゝ新吉系ふて賣ゝぞ　ものゝ人ゝものゝものゝ
治主ものゝひものゝ唄比丘尼と扇賣ハ二三十年以前まゝ〻ものゝ千歳ふ後
の小比丘尼ども黑元改中を袖り腰を高〻引ゆげ腰ふ栖枝を挿たるが
三四人を一隊ゝ〻老尼ふ率領ものゝられゝ〻人の口ふ立ゝと就ゝる声〻〻ゝる
唄ふ物をとゝゝせざれば為んすとゝゝて催促ものゝ普ふ節をまゝて唄ひ
ゝふ今ふ比尼節の名ハ遂ゝとゝゝそ地獄変相の図を說示ゝ〻愚婦を
誑ものゝ熊野比丘尼の流なるべゝ伊勢比丘尼のゝふ自笑が愛敬普男と



ゝふ冊ものゝふゝその筋を畫ものゝ扇賣ハ地紙の形ものゝる箱をものゝねて肩
ゝ毎夏ふ巷路を呼びものゝ元買ゝんとゝふ人あればその好ものゝふ任〻即坐ふ曼
を折ゝ出ゝ元兵今三十以下の人ハものゝるゝをもものゝらざるべゝれ年のものゝの美
和ゝ建武の比既ふ絶たるが東のものゝるゝものゝるゝ幕好が徒然草ものゝれ
ど今ハ東ものゝも俗ものゝさるゝものゝとものゝもものゝんすゝりね京の愁想文賣伊勢の
御ハ泉列堺ものゝる九月の雛祭も僅ふその名を存ものゝ近属江戸ものゝて猫
の画ものゝんと呼びものゝ元ものゝ生活ものゝものゝるものゝのものゝしが元ものゝが往ものゝて跡ものゝ
ものゝ又猫の蚤をとゝゝんと呼びものゝ元ものゝ妻ものゝを雞〻ものゝものゝものゝるものゝそと
ものゝも遠元ものゝものゝものゝ猫の蚤をものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝの猫ものゝ湯を
ものゝせ濡たるものゝ毛をひろものゝる獸皮へ裹てものゝる猫の蚤悉そのはものゝものゝると
ものゝ元ものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝものゝる猫を愛ものゝるものゝの寄ものゝねものゝものゝれも長
ものゝ行ものゝものゝ亦南京操ものゝの人形ハ平ものゝものゝものゝものゝものゝ両国橋のものゝる

廣巷路の勾欄まくらり狂言ハ一年中國姓爺の虎狩の版のミをつてえ
ちよと見るの程なる絶えその跡今ハ輕業をそるゆり黄精賣辛皮賣
麻賣などヨ予が幼稚りし比ちぐハ毎春ハ日ちてその呼び声をまざるを
あるこ〜ゞ今ハとく稀ハ夏ハ街所ハ立て水一椀を一錢ハ賣こ
とハ〜れの比ハとハとハを詳ハちどハ江戸の外ハかるゆ〜家ハ海内
の大都會ハ仰ぎ〜亦予がりのころ見る比ちぐもあ〜と今盤ハ行るゆ
ちくり錦繪ハ明和二年の比唐山の彩色摺ハあらひて板本所金六とい
の版摺某甲を相語版本ハ見當を付るゆを立夫〜ちぐめて四五遍の
彩色摺を製〜出ち〜ゞ狂ゆ〜所ハ〜ハ〜摺出とゆるりねと金六ちぐ
ちらハ〜ゆ和以ゆハを筆ハ〜彩色ちくりられを丹画とひ又紅画
ハ〜ハを今ハ至ちハ江戸の錦繪その立を畫せるゆ絶ち〜比ちぐ見れりの
ちられ近屬ハ紅毛の胴版さハ〜ハて出ル陸奥ゆる會津人ちぐ彼錦繪を

摸〜ちくられが世人既ハ眼熟て奇とちぐ彼金六を文化元年七月ゆ
ちハ賞初彩色摺とハ〜ハりのちぐめ〜行ち〜附その美ゆるを錦ハ似ちハ
世華ち〜錦繪の名を員〜ハん何ぞも品類ゆ〜ちハて賞翫ちぐ
も賞翫ちぐ只世る稀ゆるりのを愛ちとちるハ奇ハ珍らんとのゆるべ
亦紙煙草入とハりの予が幼稚りし比ちぐハ伊勢ちり出ハりのと下野ゆる
宇津宮ハ出ハりのを人〜賞翫ちられも狂ゆ〜細工人出ハて今
江戸ハ出ハと紙煙草入ハ世ハ敵ちゆる至ちり亦看版書とハりの商人
の店前ゆる障子行燈を張更その需ハ愈〜ハ数个字を題ちるゆ予が
弱年の比ちぐハ出ゆもあぐり〜ちぐ〜ちられちるち〜便宜の技ハれがちく
ちぐも行ハるべ〜亦挑丁ハとハりのを賣ゆ〜も十年以来のちく〜挑丁へ
胴の鐙を着るとハ正保年間ハ起ると武家放事要略ハいち磁器
の燒継ちんとち〜巷路を糶ゆ〜ちも廿年以来のちハ繼漬るどハりの

なく継たりしに比まが便利にて大によし婦女子の髪を結ふへのみなる予
が幼稚なる比ハ小鞍坐をのせて根をふくらまして鬢と髱をうちに出し髱入と
いふものをのせて髱を長くしたりれど今のごとく鬢挿といふものハなかりし
その後髪の結ざまも大に変りて少女も老女も鬢と髱を別々にして紙張
なる髷の形したるもの髱の形したる物をのせ市中の女子ハ前髪を短く
して刷毛の如く上へうちあげてかしらのまはりハ衣裳に袖口をくるみ東に
きハめてなりしに寛永年間より良賎これをもちひ侍たりそれも明和年間
に至りて袖口をさくして丸く括りたるに今ハ綿を薄くして括ることを
せざる鉋といふものも寛文年間までありしとぞ和名かんなといひならすぐる哉
すべて吹革といふものも元禄年間まで八寧なりしに元禄三年七月に開板
せられし人倫訓蒙図彙に見えたる鍋の鋳掛ハ火吹竹にて火を吹おこす
てきり覩世紙よりハ又三郎ちぢめたりと西鶴が男色大鑑にいへるおなじ

其の物もむかしの人ハせざりけん紙を漉かのちれらはるべし縮紙檀紙を
年入の用ふべれにあらざと伊豆の修善寺紙立地の紙なるども又たりしもの
貴も賎も陸奥紙をのみ用へたりしかしらずる物もししりね　あん時になれ
あひたりゆへのと有がらん渋箱するとや時に筆硯を置てりて遺忘に備
ところ漏ちるも殊あるべし

## ㊉ すゞ竹 附長篠

東海談に細き竹のことをすゞといふ古今著聞集に石泉法印鞍馬の別
当にてありしがとよんのすゞをおほくきりとりたるをある人の許へつかはすとてよめる
このもとハくらま馬の篠にかくそだちされかとそよさむかしめされな
なるべしといふ小説に鈴木といふ氏ハ武内の裔なりといふ説参考すべし
なからも十分解しかねん人ありぬと推量し侍とといへりさらればなかりのことを
解しがたくもおぼえぬに世界の人を文盲にもちたる書ざまなりける小竹をさ

とゝ[illegible]ゆくさきのすゑのほどく小の意なるをとるかゝるとゝもぐとゝ[illegible]ゆゑに竹
ロヨのちいさきをもぐのゝとゝ[illegible]ゆゑるべし和名鈔云。篠蒋魮切韻云。篠
先島反和名之乃一云佐佐俗 細細竹也とゝり細小と熟〻〻細くもゆゑ小なり
用小竹二字謂之佐佐 同書ゆゑ雅の注を引く筍音尊字作筍 和名太加奈奈 竹の初生也とあれば筍の和名たん
なるなるを後よすぐのまゝも竹のまゝもとり亦篠を志のと訓〻たるゆゑ鰒
義〻志のまゝ也も鰒芒〻さゝ前よりゆゑ細小の義なるり聊をいさゝゝと訓〻たる
もゝとさゝすゝまゝ最小の義〻兵具よりゆゑ篠蕭を淨衣よりゆゑ篠撰なるど
篠の字をさゝとももゝぐとも讀とゞ往古よりゝのとさゝとうちゝゞゞて唱
竹り日本紀 神功紀ゆ小竹祝とゝゆゑ亦萬葉集巻之七妹所笥
我通路細竹為酢 我通廬細竹原もゝゞ巻ゆ小竹介云云又巻之十一
東雲の假字ゆ細竹自又巻之十二ゆ小竹を上ゆ云云菅家萬葉集ゆ
小竹之葉丹置自霜裳獨寢留吾安許曾冷增藝礼ゝとゝ細竹を



ゝとゝ 今人のゝと唱るを
ゝゝゝゝゝとゝり又小竹をさゝともゝとゝ訓〻たれゝゝのもさゝも一物ゆ
ゝとゝりゝとゝをゝゝゝゝゝ細竹をゝのゝとゝゝゝゝゝ

紋所と稱するあらんとおもへど紋所あるは紀氏と藤原氏と二流あれば紋所の九曜
本ハ長系ノ六境卷之七 第三十一張 は内大臣藤足大臣藤原姓賜ふ[illegible]
の十月の十六日ようをあひぬひとり五十六大臣の位より廿六年この姓のいで
りをゆひて紀の氏人のひろる藤のおもをねるあらうれねるものすり今ぞ紀
氏いうをあんをるぞとのさきひてぐるまちとよそまり行るめれとのつり亦見
ひ〜ゆり紀をあるよりけるひ〜ゆひ〜亦紋あと称をる人稲穂の絶をなるを
家の紋とをるい穂積を象をるまや桜ぐるる浪合の記は紋本右系亮
重政 吉地ようを丹良親王の供をそ 家の紋幣紋 接穂とありまを同書
紋本三郎云衛政長三列 夫紀は侵をを三列の紋本是をを紀姓の紋あはあら
ぞ藤原氏ら紋藤の丸とをを考へべ〜

○附りいひ前はゆえなる石泉法印のをぐのをの歌を予いねる年あるの
ようたをぐ嘆あり予が毎歳著ん呼の草紙物語いをぐく怨卒の

際は稿〜をいるををはあ〜そひを運んは遑あふぐ〜〜悔をあり
されどその類の草紙ぐもいとろをとぶ〜〜ゆるるねぐ人許さん欲
りれも又無念をるるる

○園はいふ長間をを乃と訓をを和名鈔云兼名苑注云長間筆 今案和名乃女
筆青最晩生味大苦とをり是今いの真竹を欲を乃女い細竹芽な
るを〜ゆれば今俗の長竿ゆどりの長ゆを乃を竹は長篠ゆりを
長ゆを乃ゆ〜篠を重ね〜喝るゆるん例せば穂ある真間の継橋陸
奥ある狭のをを布ゆりぶゆりのををぬのをを〜ようど
陋と同じ陝ををれらをるを重ねを訓を異をるのをゆるる
類ゆれるを

## ㊤ 字體 俗字 誤 附

風は八は八百は八百は古は虫は八は後るををれども漢の時既は

虫ニ从ひて風と書すめい稀なりるよりト王充論衡巻之十六云夫蟲風氣所レ生蒼頡知レ之。故凡蟲ハ為ノ風之字。取レ気於風故蟲ハ日二而化生。云云。この説のごとくい虫い風ようよりて生じその虫いこれ八月ようて化生ちりされば風の凡ニ从ひ虫ニ从ふようをいうて豈百ニ又虫の古字ようというんや風を風の古字とちうこれい凡虫の説も穿鑿附會と ちん欲ちろ得ざる

○蒼頡字を作るとこれもづ一字を作るとこれいこれその類をうん譬ば水字まづ成ようて後雨字を作ようて又雨ニ从ひ水ニ从ふ水ニ从ふ一ハ於遠切。数之始也。又物之極也。亦強雞切。音兮 ようりて下螢切。林外曰門。象遠界と字書ようえたり雨を水気のもと故ニ雨ハ水ニ从ふというん欲按ずるに雨の古字冂とその字門ニ从ひ 水ニ从ふ水ニ从ふ水ニ从ふれば今の一畫も又水ようて雨ハ雲のようん不ん雲聚ざれば雨ふ



らず雨字まづ成ようて後ニ雨字を作ようとこれい雨字ようて後ニ雲聚るが如ようて古人往く理を推義を演ようて字體を説こうとこれを否ようて字體ハ理をりて説ようこれり古人の説を非ようて愚案を是ようとこれい蒼頡作ようて字を作るとこれ理の解とべらざるのこ

○小説ニ射と矮ハその義をとこれちがべたるこれ射ハ身ニ从ひすニ从ふ宜く短人の義ととべ矮ハ矢ニ从ひ委ニ从ふ宜矢を發の義ととべ矮とこれ理屈なり今試ニ射ること射ること必その身を正ようん聖人の言ニ曰射有レ似乎君子。失諸正鵠。又求諸其身。かれば射字の身ニ从ふすニ从ふかのハ矢を發の義ニ稱ようて亦短ハ矢ニ从ひ豆ニ从ようてを短人の義とと矮の矢ニ从ふかのハ短字の矢を取ようて正字通ニ委ハ鳥鬼切。音葦。云云。本曰原末曰委。説文委隨也。从女从禾。徐鉉曰委曲也。取禾穀垂穂委曲貌とこれい

矮を短人ともるその義稱へ是

○亦按ずるに短人い和名鈔ニ不載。今俗セビクとゆひ又セムシとゆひ身丈
をゆふムシい人を裸蟲とゆふが如し王云ん論衡。倮蟲三百。人為之
長。由レ此言レ之。人亦蟲也。人食レ蟲所レ食蟲亦食レ人所食
俱為レ蟲。而メ相食物何為怪之。又李石続博物志云モ
蟲之精曰麟羽蟲之精曰鳳毛蟲之精曰龜鱗蟲之
精曰龍裸蟲之精曰聖人。拾芥抄云。裸虫三百二十。
属中央。其中人為首。又云。孝経私記云。天地之性。人
為貴云云。夫天地之所生物萬一千二十四種類。裸
虫千三百三十。以人為主云云。かくれば人を裸虫とゆふなり
ひとゆふ我俗寒家の兒の衣裳ゆたのをの裸虫とゆふいなづつり貴賤
老小ゆる裸虫とゆふなづとゆれらん文字ゆあづかりねとゆれと周ゆとゆふ

○況字體を鑿て事を說ずるゆふ穿鑿附會のゆ立雜俎云樂善
録云趙韓王病遣道士上章。神以巨牌示之。濃煙罩
其上。但未有火字。趙閣之曰。此必秦王廷美。謝肇淛
謂美字從羊從大非火也。豈神明亦不識字耶。其為
後人附會無疑と。ゆとり亦福字ゆい田ゆ从ひ衣ゆ从ひ一ゆ从ひ口ゆ从ひ人
とゆ田一頃ゆとゆい衣食足ゆれ是ゆとゆ福とゆの說ゆり福い示ゆ
从ゆ衣ゆ从ひこゆとゆれ古人の笑ゆ所ゆる類ゆれ又ゆり後然草ゆのゆらく醫師
ゆゆ〜げ故法皇の御前ゆさゆゆゆゆゆゆ供御のゆゆりゆゆゆ今ゆゆゆ作る
供御の色ゆを文字ゆ功能ゆゆゆゆゆゆ

ようり今はさだりみてゆくれば不のことナされけるようどようにおりとまるを
ゆよりり今按ずるに塩は俗の苟文にその由来久しく亦鹽の古字鹽也。國語
ゆひ古より以ひ皿より以の後鹽を作る正字通云俗省作塩。篇海舉要別
作鹽塩。焼非。あれば塩の土より以ふ俗體とへども篇海舉要に載する
ようにはあらざるの杜撰なるべし大約我俗よりなるものの必草より入る故に
生涯字[illegible]なるべし予毎歳著述の稿本をもて筆工に清書を任
せ常に惜みくるの魯魚焉馬或帝のごとくなるべし予予且卿鄉鐘鍾亦の
数字に恥ずべきより以ひ心より以の且その字心部に入るべきを俗に恥に作る
玉篇耳部の末にもれを載せて俗恥と注せり雅俗の両體あり学
師ここにおいてもれを考ふべし以以を待ること久しく盲聾盲をひきやのごとし
○草は楷より出ず楷は隸より出ず隸は篆より出ず篆は蒼頡に必字於字草字
ようようの當初これを漏せる故我俗おを於の草とし非とおい村字の草と

亦拘を揃の草とし非とし拘は樹の草と亦ゆを貴の草と非とし央の草
ようり場の表るを既に久しく容齋嘗字體を論じて篇文を說文の本字なり
ようとせり俗考云今の人の作字省文に以禮為礼に以處為処に以與
為与に凡章奏及程文書冊之類不敢用然甚實皆說
文の本字也。許叔重釋礼の字云古文処の字云止也得几
而止。或從處の字云賜予也与與同然則當以省文
者為正。
○洪邁云書の字有俗體一律不可復改者。如沖涼況減
決悉以水為氵筆陵切與氷同雖士人札翰亦然。玉篇正收入
於水部中而氵部之末亦存之而皆注云俗乃知由
来久矣。唐張參五経文字以為訛。
○洪邁云今の文人多用不纖一丁の字組唐書挽兩石方

○不レ如レ識一丁ノ字ヲ出ス處ヲ考ヘ之ヲ乃チ个ノ字ハ非ズ丁ノ字ニ。按續世說。嘉ニ此ノ个ノ字ヲ蓋个與ノ丁相ー全。傳寫誤寫。後又觀張翠微考ー異。亦謂フ个ノ字ヲ乃チ知ル世ー說之言ヲ爲ル信。又觀蜀志南史。皆有所ル識不ル過ニ十字ニ之語。世通謂王平所ル識僅通ズ十字ニ。恐是十ノ字モ亦未タ可ラ知ル。十與ル丁字又相ー似タリ。其ノ文亦有據也。與淮南子言宋景公熒惑徙ニ三舍ニ之謬同。史記謂ニ三度ニ。共見千俗考ニ

曲亭子云書ヲ觀ルト難クモアルカレ一畫一点ヲ謬らざるごとくんば其ノ義ヲ通ジ易クシテ況个ヲ悟ラ丁ト或ハ十ト云フルト學者終ヲ悟ラズ其ノ義ヲ受續ラ其ノ義ヲ遠ー个の學者ハ只文字ヲ識ルヲ要とん

○唐蕭昆不ル識ラ。當以伏臘ー爲伏獵ー。又一月張九齡送



芋ヲ。刺ニ稱蹲鴟ー。蕭以爲鴟鴞ー。答テ云ク。損芋拜嘉。惟蹲ー鴟味至ラ丹。僕家妻ル恠。亦不ル願ル見ニ此ノ惡鳥ヲ也。九ー齡得ル書大笑。

事物異名苹ハ蹲鴟帝在漢

水滸傳ヲ載ル不の魯知深李逵ホ絶ル一字ヲ識らん原是寓言と

こどもその俗ヲ志ヲ足ル。天朝靖治ヲ二百年村落山野も文字

○今ノ兒女輩書ヲ觀ルヲ好メリ。ちろれども國字をその傍ヲ施さんばより遠ヲ續ど判ノ書籍ハ書肆只利のみ字ヲ傍訓をつけ

ざるよりと閲者只傍訓のみ觀ル本文を読ど放ヲ読ヲ隨ルその字体を忘ル生涯文義を悟ラ

を読ばん文義を解ヲ至ル古人文字を取テ文を作るのごとを

ばざるあらん文章ヲ和漢の差別あり和のものハ國漢のものハ

字をもつて傍訓を施すべしとぞ雅俗ともよられを続ぐに字音の漢字をそうりのみなれど中葉より音訓をやふへく唱ふるなり漢混雑の文よめらざれば俗ゑ解し易うべし和文一変して和漢を合せるものゝ如しよりて

○近属醫師のごとく本草を学ぶものあり患者禁好物を縁し人を遣してこれを問ふそのうちに鱇あり河豚の和訓をフクとよぶ俗人音を借て鱇と作る醫師これをたゝべ続てアハビとよべこれを許せしゆゑ患者飲びて河豚を食ふ後にその夜暴に死せりとぞ俗人の鱇の河豚なるをたゝべ鱇の石決明なるをたゝべ醫師の鱇の石決明なる所以たゝべ俗の河豚なるを悟らず鱇の一字なり雅俗あるをたゝべ人を殺さば何をもて醫と称べき世間ゆゑ類のとゝめなし

林本草綱目介之二云。石決明釋名九孔螺華殼名千里光。時珍曰。決明千里光以功名也。九孔螺以形名也。集解弘景曰。俗云見紫貝。人皆水漬熟眼。頻明。又云。是鱇魚甲附石生。大者如手。明燿五色。内亦含珠。茶曰。此是鱇魚甲也。附石生形如蛤。惟一片無對。七孔者良。今俗用紫貝全非云云。和名鮑云。鱇四聲字苑云。鱇一音伏見本草音義蒲角反古電同今案魚名。似蛤偏著石本草云。鮑一名鱇鮑音抱和名阿波比崔禹錫食経云。石決明和名上同亦五雑俎云。鱇音撲入声今人読為鮑非也。鱇一名石決明。一名殼。俗笠。粘石上。闘中有之。但差小耳。又万葉集延喜式ホミる鱇を作る石決明なり今俗鱇を読て不具て河豚魚を當るのみその統最甚し

○今の生藥舗皂角刺を続く皂角刺とんとれ皂角子と同音なる故

混ぜざらんみるより俗るの用ひるめづめら俗るり

○椒巷談曰灸一灼を一壯といふ壯年の人まあて艾灼と定めたるを

壯といふりちうりなるものいふたるものいふとくまつけく其數を減ずる

沈存中が筆談まうえたりとまり愚按ずるるの說非るうん壯い狀と同音

るり正字通ま狀舊註音壯火貌熏烝也。今炊粉餈謂之

狀糯。一說陸佃曰。醫用艾灸一灼謂之壯俗因作狀

狀糯說非。とうえ。亦方書ま往く灸艾狀ま作るるとうくるの義壯年

の壯を氣ろまあらざるを云ふ壯狀ともま熏烝の義るうん狀り壯年

に灸治ま艾壯と唱るものるうべ老人ま艾い老人ま

艾といふざるをるく灸一壯の壯い壯年ま當るいるまあらざるの故窮

ぶ死ぶまや亦按ま素問ま壯火ゆ火の辨ありとられども灸灼の義ふいあるぞ



○菜ハ親の首故るり苦い喜の首文るり辛い他の首文るり見ハ見の首文

風ハ鳳の首文るり丽い麗の古文るり小刻金石緣全傳ま入えたりとれ

唐山の俗首欲録しるるく選忘ま海ま

○我俗燈花のるを結ぶものをるく丁る頸とん桂ざるま丁も又燈るり

五雜組云閩方言。以燈為丁。每添一燈則俗謂之添丁。

王又書言故事。生子自云添丁。唐盧仝生子名添丁。欲為

門戶特役也。韓文公寄盧仝詩。去歲生兒名添丁。云云

らの添丁い民丁の丁と五雜組るの添丁と同じるく正字通云隋文帝頒

新令。男女十八歲以上為丁。以役課役云云とえるいられ

我俗燈花を祝しるくするこく吉丁るとるの見則唐山の諺ま昨夜有燈花

報。今朝在喜鵲噪。といるま同じ唐山の俗燈花を祝ぶるとと最甚

盧江王夫人嘗燈花占一篇を著ぶりその略るを右の占。乾鵲噪而

行一人至。蟻子墜而得酒一食。燈一花結而喜事生。故少陵詩。燈一花何太喜。云云。我俗丁子氏の丁字を丁香の丁とするハ能き

字ハ似るハいよ〳〵俗なり

○的字ホウベニと読べし五雜俎以レ冊注レ面曰レ的。古天子諸侯勝妾。以レ次進レ御。有レ月事者。難レ以レ職。射之有レ的。云云。我俗意味の女なるを的と称と亦是射の的の如し外をもとめざるの義なるべし

○椙畑畠辻迚杜木の數字ハ和製にもとゝもその實ハ和字なれども呂字を合するの義椙木を椙と作る読べし賀茂田を畑と作る読べし波を白田を畠と作る読べし波を毛と十を辻と作る訓字の如しハを迚と作る読べし止天と杜木を杜と作る読べし毛里と唐武后新字を製して日を㊀と君を周と類ハ亦按するに韓此云須喜 艦

此云志豆計 飯此云熟我礼 嘶此云佐奈之 寵此云祢比 ハ全近世俗間通用の國字なれども文雅の書ハ用ひず字書ハ たゝ

○南畠敝志ハ字ハ所の半体なるべし〳〵世の人片假名のヽを半体と思ひ違ふ

草なれば草〳〵と作るハ愚按するに曾の字体を世人の草をあるハ畧して

○今のひらがなハ俗のまゝ

〳〵郷の草なれば草と書べきを俗ハ

るよられをりとえと崎べえと作るハ非なり呂の草なれば呂と作るべ

まるべきろと書りさいとするべし敢ちべきと書べをとと書べきと

ところそ左の草なれば左と書べをさと書べきと書べきろ〳〵えいえまと者の草な

とびとと書べきをそと書いろ〳〵しまる〳〵その草なるよ〳〵と書
いろ〳〵つい川まる〳〵川の草なるよつと書いろ〳〵祖来紀いつを月すと
いられしいろいろ〳〵万葉集ま川をつと続ちるいるよりめ〳〵べ
つと書ぶ〳〵との餘れい本の草母い保要い麿の草と又あい奉そい堂
ま い則るいるねい称るい年の草とられら草の體を失ざればさ〳〵
悔るくすれい列の草ととの説いるい礼しる葉集ま妻〳〵又えたり亦
按ぶるよていとよく〳〵天の草なるよとと書と紀い草の體を失つま又〳〵と
素と紀い豆の草と天ま〳〵俗いくまま日なれてと書いられをてと
読るりくい久の草なれぶ〳〵と書ぶ紀〳〵首畧ま過〳〵りりい利の草
なれべわと書べきを俗そりと書をりて利の半体とおりて〳〵られどもひち
るとのめま字の半體めとるい〳〵ひらあるま半體めとるい片假字
い作るぶ〳〵室町殿の時の券書日記亦をえるま妻〳〵片假名ま〳〵書を



られ片假名い圓字の楷書なれば読りの迷ざらんなるべし日本紀古ま紀
亦の假名い大ま今ま異〳〵保の假名ま繕流の假名ま曜止の假名ま菟又
通の假名ま也を用立音通ぶれがさ知る類毛峯ま遥あらび上代ま
てを豆と書〳〵天と書亭と書い稀〳〵を紙烏或い牛と書て遠と書越
と書い稀〳〵濁音も亦正〳〵りたぶ傳ぶい婆と書て今の如くを施と
よ〳〵る〳〵万葉集い義訓ま〳〵今僅ま俗の用る假字若簡の両字ま過び新
撰萬葉集日本紀竟宴和歌ま至て〳〵假名既ま一変をられらも一字ま
假名の違るいま〳〵和名鈔の假名い大ま今ま近〳〵とべども是も假名い正
しかりて亦按ぶるまねの字を片假名まあ〳〵い示と書りられ彌の字の
半體ま〳〵りるるの比〳〵るまと書〳〵示と云りの〳〵字い十二まみねと
読のと字の半體ま〳〵らの四十七字まい　天朝日用の神宝るまるられ
ま疎るい送恨のまとと兵童蒙のみるいまのをとるびたるかまるい笑

るべし

○仙と俗と字體相近し仙人は必ず山に居り俗人は必ず谷に居る人愚なれば真を修しもとるに至らざれば人慳ならざれば富を致す由なし仙人は山林を栖とし常に紫極を慕ひ俗人は色府に在て山林の口気を離れず蒼頡字を為るや固に故あり

○山居する人は命長し海濱の人は夭なり姑らくこれを試みるに山中人は魚肉を忘れず常に蔬食して或は木実草実を粮とし薪を折炭を焼き羊腸なる険阻を上下して殆んど體なく躬をして且その居る所都會に遠ければ慾寡くして命長し仙の人に従ひ山に入る故あり海濱の人は魚肉に富みその飲食都會の人と異なるべし加之弘に楫を操り彼上を往来し一歩も運ばざるに却風濤に揺られその體なく脾胃を損じその漁猟を生活とするを以て慾少

人慾寡ければ壽なるべし人死曰殁又作沒沒は水に没ひ又は兵に亦以ておるる

○学問の道は文字の間に置き身を脩行を慎むにあり禅宗の不立文字見性成仏と説くもその義なるべしこれども後人先聖の教を受けその言を聽きその行を学んとするに文字によらざれば何をもてか項羽不学。書は姓名を識るに足るのみと項羽すでに可し強梁に覇たらんと英雄人を欺くとせん欺秦は儒を忌みこれを坑し書を焚き民を愚にせんとせり惑るるに項王高祖は儒にあらざるその大業をなすものは天は徳にあり何ぞ文字にあらんや

○書画は文学の餘韻なり人書画をなすに暗ければ雅致風韻なし字をあらぬ字を写し圖にあらざるを繪を画くものは精なしてに私を彩を鑣なして馬に乗が如しなんとなれば一つ必もなくば乗ずべからず今悔る

愚(グコウ)なる人(シヒト)は悔(クヒ)あらちんごろのう愚(グコウ)なる人(ツトム)は勉(ツトム)るべし人(ヒト)を
うらやまず智(チロウ)老(オコタ)も懈(オコタ)まず塵(チリ)をはらい避(エサケ)べしその智(チ)あらんものべくその愚(グ)みるべし